

痴物語—シレモノガタ リ—

愚者の憂鬱

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

舞台は直江津から遠く離れ、

捻くれた少年、比企谷八幡は

美しき人狼の姫と出逢う。

”お前の依頼、請け負った”

これぞ現代の怪異。怪異。怪異。

青春は、間違うからこそ「面白」い。

目次

あざみウルフ

其ノ捌	194
其ノ捌	173
其ノ漆	162
其ノ陸	130
其ノ伍	106
其ノ肆	81
其ノ參	63
其ノ貳	38
其ノ壹	1

あざみウルフ

其ノ壹

青春とは嘘であり、悪である。

青春を謳歌せし者たちは常に、自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境を肯定的に捉える。彼らは青春の二文字の前ならば、どんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げてみせる。

彼らにかかれば嘘も秘密も罪科も失敗さえも、青春のスパイスでしかないのだ。

仮に失敗することが青春の証であるのなら、友達作りに失敗した人間もまた、青春のど真ん中でなければおかしいではないか。

しかし、彼らはそれを認めないだろう。

全ては彼らのご都合主義でしかない。

これこそ、俺こと比企谷八幡が、曲がりなりに十七年という歲月の中で見つけた、『青春』とは何かという永遠の謎に対する『解』。

普通に生まれ。

普通の家庭で育ち。

普通に友達が出来ず。

普通に弾き出され。

普通に後ろ指を指され続けた俺が、普通に考え出した最適解。

今でもそれを、間違つたことを言っていた、とは思わない。

だけど。

あれほどまでに濃密で、文字通り『異常』な時間を過ごした高校二年生の春休みは、それまで揺るぎなかつた俺の価値観を根本から覆すには、いかんせん十分過ぎたのだ。

はくめんこんごういぬがみぎようぶしろうまさむねのあざみひめ
白面金剛隠神刑部四狼正宗之薊姫。

数多の『異常』を引き連れた彼女は、夜の帳と共に突如眼前に現れ、様々な改変を俺に与えた。

しかし、その結末は悉く凄惨たるものだった。

後に俺と彼女との間には、切つても切れない幾つもの縁が複雑に絡み合い、多くの禍根が残ることとなる。

一心同体。

表裏一体。

今や互いを抜きに語ることはできないその『縁』。

今回は、漠然とそんなことについて語ろうと思う。

さて、本来なら前述の『解』は、「砕け散れ」という捨て台詞に近い文言で締めくくる予定であったが、ここは敢えて、ことのあらましを全て知っている現在の俺が、俺なりに考えた新しい文言をもって、この長い自分語りのオチとしよう。

さあ、青春を楽しむ愚か者ども、

露と消えるがいい。

あざみウルフ

其ノ壹

参月式拾伍日

長期休暇。

果たして世界に、これほどまで俺の心を踊らせる四字熟語が他にあるだろうか。

自由登校。

臨時休校。

やだ、結構ある……。ていうかどんだけ学校いきたくないんだよ。

高校一年生の春休み。一年前の入学式から、特に何か良い思い出ができることもなく。ビックリするほどの平常運転で時が過ぎた。

世間一般には、新学期に向けた準備期間とされるこの数日だが、言うまでもなくそんなことに時間を浪費するつもりはない。そもそも三年生になるわけでもないのに、机に齧りついて勉強する気にはならない。何かするにしても、専ら昼寝といったところだろう。

今朝も六時過ぎには目が覚めていたが、心地よい肌寒さもあつて惰眠を貪り続け、気付けば時計は十時を過ぎていた。しようがないよね、春休み初日だし。

寝巻きのままベッドに寝そべり、枕元に置いてあつた中程まで読みかけの文庫本を手取る。中身は今時珍しくもない推理モノだが、これが結構面白い。惜しむべくは、上下巻を一度に買わなかつたことか……面倒だけど、今度買いに行くかな。

まあ、その『今度』が一体いつ来るのかは俺のみぞ知る。

暫く読んでから、腰に不快な負担を感じた俺は、ベッドに横たえた体をゆつくりと起こす。思い切り伸びをし、背骨を小気味良く鳴らして、部屋に一枚だけ備えられた窓を見ると、そこにはうつつすらと俺の姿が映っていた。うん、いつも通りの腐った目。今日も良い感じにチューニングあつてるね。

髪は伝説の戦鬪民族みたいになつてるけど。何よコレ。悟○の初お披露目でもこんなに逆立ってなかつただろ。もうあと一眠り決めればヤ○チャくらしいの戦鬪力は手に入るかも……いや、しないけどね。

「……流石に風呂には入っておくか」

そんな独り言を呟いてから、溢れ出る気を鎮めるために俺は部屋を後にした。

階段で一階に降りて、リビングのドアを開ける。一風呂入る前にお茶でも飲もうかと思っただが、どうやら先客がいたようだ。

「おはよ」

「んー、おはよー」

マイルスウィート妹こと比企谷小町。流石だけ、ソファに寝転がってテレビ見てるだけなのにどこか気品を感じさせる。やってることは中年主婦と同じなのになあ……。年齢が生む見栄えの差って残酷。

キッチンに入り冷蔵庫を開けると、真っ先に目についた紙パック麦茶を取り出す。適当に収納から取り出したコップに、その透き通る茶色の液体を注ぎ込んだ。

まあ美味しい。しかしどうしても、パンチが足りない感じが否めない。

本来なら、朝一発目はMAXコーヒーでがつり決めたいところだが、なにせ糖分含有量が洒落にならないからな、アレ。用法用量を守らなければ。

「あ、そう言えばお兄ちゃん。今日家に小町の友達呼ぶから、嫌なら外出を倍プッシュするよー」

お前は最強の雀士か何かか。

ざわ…ざわ…ざわ…

ふん、聞き慣れてるぜそんな喧騒。何故なら俺が何か変な行動をしでかす度に教室がそんな感じになるからな！

まあそんなことは置いておいて、家に友達か……。

「マジかよ。そりゃ俺も外出倍プッシュだわ」

最早友達がいけない事に誇りすら持つている末期ぼっちである俺に比べ、小町の対人コミュニケーション能力は一味違う。

普段は一人の方が動きやすい、だから一人。でも友達がいけないというわけでもなく、寧ろクラス内では人気者の部類にすら入るといふ。中学二年生にして新進気鋭のハイブリッドぼっちである。

なにそれ超懂れちゃう。俺の妹は世界一イ!!? でももし一つ言うことがある

としたら、勉強はもう少し頑張ろうね。一緒の高校行こ?

「……つつてもなあ。外出したところでやるのが全くないんだが」

「そこらへんは小町管轄外だし」

「まあそうなんだけどよ」

仕方ない。せつかくだから、例の本の下巻でも買いに行くか……ついでに昼でも食おう、サイゼで。

これから押し寄せるであろう退屈な時間に、腐った目を更々に腐らせながら、のろのろとした足取りで風呂場に向かった。

最寄駅から数駅。

適当な外着に着替え、我らが千葉県中心の地、千葉駅に降り立った俺は、駅前で最も大きい書店に向かう。飲食店からブティックまで幅広く揃えている、総合ビルのフロアの
の一つである。

家を出た時は様子見がてら薄めのパーカーを着ていたが、春先とはいえ思いの外肌寒い。周りを見回しても、厚着の人々が目立つ。これは早めに屋内に入らなければ、風邪で貴重な春休みを全損する可能性も出てくるな。

やや早足気味でいつもの道のりを行く。すると数分後には、目的の本屋が見えてきた。

ガラスの自動ドアを潜り、暖房の効いた店内に侵入する。俺が侵入とか言っちゃうと軽犯罪感半端ないな……自分で言って悲しくなってきた。

店内には、本屋独特の、真新しい紙の香りがほんのりと漂っていた。

「……おっ」

陳列棚をくまなく探し回り、一周半。ようやく見つけた御目当ての本に、俺はつい感嘆の声を上げてしまった。恥ずかしい、誰かに聞かれてないよね。

匂を若干外しているその本は、レーベル別にずらりと並べられ、広い店内でも随分奥まったところで背表紙を覗かせていた。やはり、隠れた名作といったところか。俺と同じだな。まあ俺の場合陳列場所が分かりにくすぎて店員にすら気付かれないまでである。

……さつさと買って帰ろう。

そう思った瞬間、俺はすっかり忘れていたある事実直面した。

そもそも俺はなんで部屋を出たのか。春休み初日の絶好の惰眠日和に、わざわざ、こ

の俺が。

妹の友達と鉢合わせるのが嫌だからだろう。何事も直ぐに帰宅優先に考えるのは、エリートぼっちの悪い癖だ。

まずは、この先何で時間を潰すかのプランを考える。本を買うのは、その後でいい。しかし、俺の逡巡が生んだ僅かな隙に。

ぼーっと間抜けた顔で棚を眺める俺の面前で、突如視界の端から現れた腕がお目当ての本に向かつて伸ばされ、その指ががちりと背表紙をホールドした。

「あ、」

「あ、」

思わず口を突いて出た、たった一文字の母音。腕の主もまた、俺のそれに対し、奇しくも全く同じ反応を示した。

「あつ……と、その」

ぼっち特有のアドリブへの脆弱さを前面に押し出し、しどろもどろになりながら横を向く。

そこには、今までテレビの中でしか見たことがないような、絶世の美女がいた。

抜けるように白い肌。薄いメイクしかしていないのに、パツチリとした目元。薄いピンクの唇は、天井の蛍光灯が反射して艶やかな輝きを放っている。

肩までの黒髪を靡かせ、美女も俺と同じく真横を見て、その先でバツチリと視線が交差した。

年は、俺よりも少し年上だろうか。思わぬ出来事に相手も多少驚いているのか、クリクリとした目が何度か瞬きをしている。それでも、視線は俺と合わせたままだ。

硬直したままの空気に気付いた俺は、現状の微妙な雰囲気を開きため、先に美女に切り出した。

「あの、それ、どうぞ持つて行ってください。俺は他の店舗で買うんで……」

一瞬棚の本に目をやって、すぐに視線を戻す。

しかしその一瞬で、眼前には劇的な変化が起きた。

美女の顔が、キョトンとした自然体の驚きから来たものから、底冷えがするほどの『形作られた』微笑みをたたえたものになっている。

なんだ、この女は。一体どんな生活を送ったら、あんな強化外骨格のような表情を組み上げられる。

「いいえー、どうぞどうぞ。先に見つけたのはあなたですから」

そんな純度百パーセントの人工笑顔で言われたって、何も響くものはない。むしろ怖い。世の中の男は、この笑顔にあやかっただけで飛び跳ねて喜ぶのかもしれないが、俺には精々表情筋をひきつらせることくらいしかできない。

「いつ、いえ……。何事もレディファーストだと、母ちゃんからキツく躰けられますから……」

麻痺した感覚の中でも、辛うじて口角を釣り上げてみる。今の俺は、きつと酷い顔をしているだろう。

そんな俺の姿を見かねたのか、それとも俺が『見破った』ことを『見破った』のか。女は一瞬含みのある笑み——この時の俺は、それがどんな意味を含んでいるのかを全く察することができなかった——を浮かべて、予想外の言葉を切り出した。

「面白いね、君！　よし、ちよつとそこらでお姉さんと一息つかない？」

「……は？」

またも思わず、間の抜けた声が飛び出してしまった。今日の俺口元緩すぎ……。お口チャツク!!？

「お言葉に甘えてこの本は買わせて頂くけど、それじゃあ私の気が済まないし、コーヒーでも奢らせてよ」

「いえ、お気持ちだけ受け取らせていただきます」

「まあまあそう言わずに」

ずい、と。ただでさえ近かった距離が、女の歩みでさらに縮まる。強烈に魅力的な上目遣いも同時に炸裂するが、俺に対しては効果が薄い。

それを女も察知したのか、むう、とつまらなそうな顔を見ると、すぐに上体を起こして俺を真正面から見据えた。

見れば見るほど綺麗だなこの人。怖いけど。

「大丈夫だって。とって食ったりはしないからさ」

「……」

やはり、俺の怯えは既に察知されていたらしい。なにこれ超恥ずかしい。

「上のフロアの喫茶店でいいかな？」

「いや、あのですね……」

「いいかな？」

有無を言わせないプレッシャーを感じる……。それは提案ではなく勅令です、陛下。

しかし、この人は何を考えているんだ。とって食わないというのなら何をするつもりだ。通報か？

同じ本選んだだけで豚箱行きとか、流石に笑えないだろ……。

でも、逃げられそうなのは事実であって。

「……はい」

ごちゃごちゃ考えるのはよそう。

俺は覚悟を決めて、軽やかな足取りでエレベーターに向かう女の後を追った。

喫茶店に入つてすぐ、俺たちはテーブル席に着いた。現れた店員に、雪ノ下さんがコーヒーを注文し、メニューを開くのも億劫な俺は「同じのを」とだけ告げる。こうして、奇妙な一行の会話が幕を開けた。

「私は雪ノ下陽乃。大学生ね」

「比企谷八幡……高校生です」

「突然だけど、比企谷くんは幽霊とか見たことある？」

「はい？」

さつきチャックかけた側から……。もう俺の口は壊れかけなのかも知れない。今度修理を請け負ってくれる業者を探そう。ついでに目も直してくれないかな……。

ありきたりな自己紹介から始まったかと思えば、雪ノ下さんが突然言い出したその謎の文言を、俺は未だに飲み込めないでいた。まさかとは思うけど、このまま変な流れで壺とか買わされたりしないよね？

「あー、ごめんね。ちよつといきなり過ぎたか」

「……はい、まあ……」

てへ、なんて言いながら。ちろりと舌を出して、わざとらしい反応をしてみせる雪ノ下さん。あざとい……。ただ何をしたって様になるから美人は得である。

つーかわざとだな、この人。全部、俺がびっくりするのが面白くてやってるんだろう。まあそんなのに逐一いい反応しちゃう俺も悪いんだろうけど。

「別に怪しい話とかじゃないんだよ？」

ただ、なんて言うのかな。私、所謂『そういう』系の話を集めるのが趣味だったりするんだよね。あとは、簡単な『占い』とか得意

だつたり」

「そういう、つてのは、妖怪とか、そういったものですか？」

「そうそう、飲み込み早いねー。流石だね！」

「いや、飲み込みとかそんな感じの話じゃないですし、流石とか言うほど親しくもないじゃないですか」

「うん。ツツコミのキレもいいね」

終始この人のペースだな、会話が。おかげさまで俺の方から全く話を切り出せない。いや、そもそも家族以外との会話で自分から切り出すことなんて滅多にないけども。

それにしたつて、依然謎が多い人である。

白いコートに、高そうな宝石のイヤリングにネックレス。喫茶店に入つてからは上着を脱いで、下に着ている黒のタートルネックのセーターが、彼女の豊満なボディラインをくつきり浮かび上がらせている。本来なら俺も盛大に鼻の下を伸ばしていただろうが、そんな思いも彼女が讚える笑顔を見ればすぐに収まる。本当の顔が見えてこない。美人といえるのにこんなに心踊らない状況は初めてだ。

しかも彼女は、現代の女性らしい洗練された服装をしてるのに、オカルト趣味があるという。怪しいブレスレットとか数珠とか、そういった小物は見た感じ何も身につけていないのだが。

「そんな見るからに嘘くさいものは着けないよ?」

「図らずも全身を舐め回すようになった俺の視線に、雪ノ下さんは面白そうに笑いながらいった。俺はアレか、思っていることが文字となって顔に浮かび上がる能力者なのだろうか。全然学園都市で生き残れそうにない。」

「さては君、オカルトを全く信じない人種かな」

「ええ、見えるものしか信用しない主義なんで」

「絆も友情も愛も、全部目視できないからな。」

「……いるよ」

「雪ノ下さんは微笑みを崩さない。それでも先ほどまでとは違う、どこか深刻な雰囲気であられたその言葉に、俺は言外の説得力を感じ取った。」

「見えないだけで、ちゃんとそこに在る。私や先輩たちは、それを『怪異』と呼んでる」
様々な疑問が、俺の中で一斉に浮かびあがる。

正直なところ、多分に信じかねることを言われてはいるが、はたして目の前にいるこの人がそんなくだらない嘘を、見ず知らずの男子高校生に吐くだろうか。

では一体何故、そんなことを俺に教える?

どうして教えるべきだと思った?

『怪異』とはなんだ?

先輩とは誰だ？

この人は、何者なんだ？

「うーんそうだね、とりあえず一つずつ答えよつか」

「……………」

なんでもないかのように、彼女はそう言う。

今、確信した。『怪異』だかなんだか知らないが、少なくとも彼女は俺の心が手に取るように分かるのだ。当てずつぼうでも、読心術でもなんでもない。科学でこの謎を証明するには、あまりに彼女の力が正確すぎる。

どこまでも得体の知れない存在に、俺が思わず押し黙っていると、店員がコーヒーを二つ運んできた。まだ席に着いて間もないはずだと思いつ計を見るが、すでに入店から五分近く経っていた。

知らぬ間に、俺の時間感覚は大きく乱されていた。

雪ノ下さんは、優雅な動きでコーヒーを口に運ぶ。何気ないその仕草からは、彼女の育ちの良さが節々に滲み出ている。

一口だけ飲み込んで、ゆっくりとカップをソーサーに戻し、雪ノ下さんは微笑んで語り始めた。

「まず一つ目の疑問。『何故、こんなことを君に教えるのか』、だけど……そうだね、有体

に言つてしまえば忠告。敢えて強く言うなら、警告、かな」

「……」

俺は、何も言えない。

「二つ目。『どうして教えるべきだと思った』かは、さっきの警告つて言葉から大凡察してくれるでしょう?」

比企谷くん、文系には強そうだし。戯けた調子でそう続ける。

「……」

俺は、何も言えない。

「三つ目。『怪異について』。正確に言うなら、さっき君が言った『妖怪』とかのイメージとはちよつと違う。人間が生み出した都市伝説、信仰、畏怖、といったものによつて形作られた存在。見える人には見えるし、見えない人には見えない。この点は確かに幽霊と似てるね」

「……」

俺は、何も言えない。

「四つ目。『先輩たちにかんして』はそうだね……。君は、ここから電車を乗り継いで五、六時間したところに、『直江津』つていう土地が在るのは知ってる?」

「……いいえ」

俺は、小さくそう答えた。

「今、その先輩の一人がそこに滞在してるんだよね。なんでも、『怪異』絡みで厄介ごとがあるんだとか。まあそうだね、私よりも凄い人たちだつてことだけかな、今言えることは」

「……」

俺は、何も言えない。

「よし、じゃあ最後の質問ね。『私は何者なのか』……か」

俺は小さく喉を鳴らした。気が付けば、握つて膝の上に置いていた両手のひらに、うっすらと汗をかいている。

「私は……」

自分でもよく分からない緊張感に飲み込まれて、言葉の続きを待つ。

「君の味方、かな」

存外、間の抜けた回答に、俺は膝から崩れ落ちそうになった。おっと、今座ってるんだつた。

いや、そうじゃなくて。

「いや、そうじゃなくてですな」

心の声漏れていた。もういいや、八幡のお口はガバガバの大洪水よ。どうにでもなくあれ！

「なんか、君『友達』って言葉に謎の拒否反応持つてるみたいだし。他にいい言葉が思いつかなかったんだもん」

「だもん、でもなくてですな……」

そう言つて、またわざとらしく下唇に指を当てて戯けてみせる。何やつても本当綺麗だなこの人は。一周回って嫌いになりそうだわ。

俺としてはもつと、相手の心が読める力についてとかの説明が欲しかったのに、ザツクリとしすぎだろ。

いや、もつと根本的な話。

「俺にこれから起こる出来事を、確実に回避するための助言とかは……無いんですか」俺の言葉を受けた雪ノ下さんは、一瞬静かに何かを考え込むが、すぐに明るい調子に戻る。

「何かしたところで、私にはどうにもできないことなんだよね。全ては君の選択にかかっている、みたいなの？」

「みたいなの、つて……」

「私はあくまで、『君』のことが分かるだけであつて、『未来』のことが分かるわけではない。それに、『専門家』でもない人にこんなことを話すのは、あまり褒められたことじゃないし」

余弦さんにまた怒られちゃう、と小さく漏らしたのを、俺は聞き逃さなかつた。余弦とは、例の先輩のうちの誰かだろうか。

「ま、『味方』つて意味は、もしかしたらすぐに分かるかもよ」

口を吐く言葉全てが謎を生んで、最早薄ら寒さが収まらない。でも、目の前にいるこの人、雪ノ下陽乃さんが『悪い人』ではないことだけはなんとなく分かつた。にわかには信じ難いとはいえ、見ず知らずの人間に危険を教えて、注意を促すくらいには、この人は世間一般レベルの良心を持っている——ということだと思つて、いいのか。

そんな俺を傍目に、雪ノ下さんは懐から取り出したペンで、テーブルに置かれたレシートの裏に何かを書き始める。

完成したのは、誰もが一度は目にしたことのある数字の列だつた。

「これ、私の携帯番号。用があつたら電話して。あ、やっぱり用がなくても電話していいよ。お姉さんが大人な感じに遊んであげよう」

「かけませんよ……」

危ない危ない。思わず十代の欲情のおもむくままに携帯をポチるところだつた……。

流石は三大欲求の一角、一筋縄じゃいかないぜ。

「そ、残念」

つまらなそうに唇を尖らせて、陽乃さんがペンをしまった。

「それじゃあ、私帰るね」

もう用は済んだし。そう言つて、雪ノ下さんが席を立つ。

またしても俺の口が小さく驚嘆の声を上げそうになるが、今度は抑え込めた。八幡、やればできる子。

コートを着て、レジに立ち手早く会計を済ませた彼女は、店に入った時と同じく軽やかな足取りで出口に立った。

正直なところ、もう少し話を聞かせて欲しい。漫画や小説でも、謎をばら撒くだけばら撒いて去っていくキャラクターというものには、どうしてもやきもきさせられるものだ。

怖い怖い。マジで怖い。

今日は小町に迎えに来てもらおうかしら。

「お気を付けて。比企谷八幡くん」

ひらひらと手を振る雪ノ下さん。

その時の顔を、俺は未だに忘れられない。

彼女は。

雪ノ下陽乃さんは。

きつとあの時、仮面を外した本当の顔で。

笑っていたのだ。

あの後、俺も雪ノ下さんを追うように喫茶店を出たが、辺りに彼女の姿はなかつ

た。ちよつとテンプレすぎるだろ。

結局、夕方まで時間を潰そうと入った漫画喫茶に入ったものの、静寂と暗闇が怖くて漫画の内容が全く入ってこなかった。そんなこんなで気が付けば十九時。店を出ると、太陽はとつくにビル群の影に潜り込んでいた。

行きは電車を使ったが、満喫の店先である現在地からだ地下鉄の方が近いと判断し、早足に駅へ向かう。暗いとはいえ、何度か通ったことのある道だ。それでも、辺りをキョロキョロ見渡しながら高速で移動する目の腐った謎の生物を、通行人はよく通報しなかつたものだ。……なんか新種のUMAみたいだな。捕まえたら賞金とか貰えるの？

やがて、駅入口が見えてきた。

地下に続く長い階段を、何度か見た駅名の掲示を確認してから降りていく。夜の帳が下りた外と違い、駅の中は無数の蛍光灯が全てを照らし出してくれる。夜の帳が

ようやく俺はそこで一息ついて、張り詰めていた警戒心を解いた。

どうやら俺は、なんだかんだで相当参っているらしい。

「……」

思えば、知らぬ間にオカルトを信じきっている自分がいることに気が付いた。

確かに、雪ノ下さんが見せた読心術のような力は、全く得体が知れない。だが、よく

よく考えれば、『それだけ』のことである。俺の目の前に、本物の『怪異』とやらが現れたわけではない。

彼女の言い分が正しいのなら、都市伝説の類い、つまり口裂け女や人面犬は、実在してもおかしくないということ。

なんて馬鹿馬鹿しい。

今時そんなの、小学生だつて信じまい。

そうだ、そうだと、どこか無理矢理自分を納得させるようにひとりごちる。

なんだか怖かったので、自分の足元だけを見たまま、タツチ式の改札を通る。不思議と人の目は気にならず、何もないままホームに着き、そこでようやく視線をあげたのだった。

ここで俺は、初めて異変に気付く。

嗚呼、なんて愚か者なのか。

こんな目に見えた変化に気が付かないなんて。

ホームには、俺以外の人間が一人も存在しなかった。

辺りには、人っ子一人居ない。ほんの僅かな音もない。俺が今立っているホームも、向かいのホームも。ただ異質な雰囲気だけが濃密に満ち満ちていた。

下を向いて歩いていた時、俺は視線が気にならなかったのではない。そもそも人間が

俺以外に存在していなかったのだ。

いや、思えばもつと前から変化は起きていなかったか。俺は街中で、果たして俺以外の人影を見かけていたか。

これはもうダメだ。

巻き込まれないようにしていたつもりが、全く出来ていなかった。

完全に『怪異』とやらに先手を打たれたのだ。

「嘘だろ……」

軽いパニックに見舞われた俺は、震える手でポケットから携帯を取り出す。電源ボタンを押して電波の入りを確認しようとするが、勿論アンテナは一本も立っていない。

さらに言えば時刻表示すら、午前二時二十二分というありえない時間を表示していた。

「まさか……まさかだろ。本当にこんな……」

そんな馬鹿な。確かに確認したはずだ。

駅の満喫を出た時、携帯は午後七時ちようどを示していた。

懸命に辺りを見渡す。何かないかと動き回るが、目に付いたのは電車の運行状態を示す電光掲示板だけ。天井から吊るされたそれは、すべての表示が真っ黒に塗りつぶされていた。

何もかもが『異常』。

突如非日常のど真ん中に放り投げられた俺は、ただ情けなく震えることしかできなかった。

「何か……、明確な何かが起きる前に、なんとか……！」

自らの拙い想像力では、これからどんな『怪異』が現れるのか、全く予想できない。あれだけ警告されたのに、と過去の自分を糾弾するが、そんなことでは現状をどうにもできない。

今は取り敢えず、認めるべきだ。

これから俺の身に、超常的な何かが起こる。

起こってしまおう。

コツン、と。

遠くで何かの足音がした。

俺は音が聞こえた方に、弾かれたように振り向いた。

音は断続的に響き、だんだんと大きくなっていく。

それが、厚いブーツを履いた人間のものだど気付いたのは、ホームのずっと向こうに、ヨレヨレのロングコートにハットを被った男が佇んでいるのを見つけた後だった。

革のスーツケースを提げた男は、悠然と歩いて俺の方へ向かってくる。

しかし、俺は慌てふためいて泣き叫ぶわけではない。不思議と俺は、その男が『怪異』ではないことが分かったからだ。寧ろ、心のどこかでわずかに安心していた。

俺の目の前で立ち止まったその男は、日本人ではなかった。目深くハットをかぶっていたため分かりにくかったが、おそらくラテン系の四十から五十代といったところだろう。顎には無精髭が伸び放題になっており、長くウェーブしている黒の長髪は後ろで一本に結っている。

「失礼、道を探ねたいのだが……」

厳つい雰囲気顔の顔とは対照的に、優しい声色で男はそう尋ねてきた。綺麗な日本語だ。

俺は呆然としたまま、首を縦に一度振った。

男は、ありがとう、と言って暗い線路の先を指差した。

「直江津という街に向かいたい。方向はこっちで良いのかね」

直江津？　どこかで聞いた単語だったが、脳が未だパニックのままなせいで、しつかりと思いつけない。

思わず俺は、なんの要領も得ないまま再び首を縦に振った。

男はまた、ありがとう、と言って、ハットを深くかぶり直し、目元を隠した。

「そうか……君は迷い込んでしまったのか……」

「……は？」

「いや、なんでもない。こちらの話だ」

そう言つて男がハットのつばを上げた時、そこには温かい微笑みがあった。

「ここで出会つたのも何かの『縁』だ。願わくば、君に幸があらんことを」

そう言つて、空いている方の左手を差し出してきた。黒い皮手袋に覆われていたが、見ただけでゴツゴツとした質感が伝わってくる。

なんとなく、俺も左手を差し出すと、男は力一杯俺の手を握つてきた。思わず声を上げてしまいそうなほど強い力だったが、なんとか堪える。

彼が何のために、こんなところを徒歩で移動しているのかは気になったが、生憎そんなことが聞けるほど今の俺のSAN値に余裕は無い。

結局、その男とは何もなま別れた。

トンネルの暗闇に消えていく後姿には底知れない不安を感じたが、それでもかすかに聞こえていた足音がついに消え入つた時、そんな思いも無くなつた。

「……何だつたんだ、あいつ……」

正直、想像してた『怪異』の感じと違いすぎてかなり混乱しているんだが……。人間のおっさんと握手させるとか、そういったタイプの『怪異』なのだろうか。いや意味わかんないし。

ほんの少しだけ平静を取り戻した俺が、男を見送ったトンネルから踵を返そうとしたその時。

新たな物音が、駅構内に反響した。

しかし、今度の音は、足音なんて生易しいものではなかった。

強烈な力でコンクリートを砕き割るかのような、正しく轟音。

「うおっ……っ!!?」

一際大きなその音が鳴り響き、先刻の男がきた方向のトンネルから、大量の土煙が流れ込んできた。細かな塵の中には、飛び出しては線路の上で二、三回跳ねてから転がる小さなコンクリート塊もある。

数秒遅れて。

闇の中から、白銀に輝くシルエツトが浮かび上がってきた。

ホームのずっと奥。

深緑色の軍服に身を包んだ女が佇んでいる。

その姿は依然薄い闇に覆われているが、頭部から流れる銀の長髪が、僅かな蛍光灯の光も反射していた。

何もかもが現代日本では見かけることのないであろうその女の出で立ちだが、そんなものを差し引いて、最も彼女の『異常』を際立たせているものがあつた。

全身に深く刻まれた裂傷である。

それは服を焦がし、その下にある肉を抉り、場所によつては骨にすら届いているであろうものも見受けられる。

「お……い、あんた……」

あまりに痛々しいその姿に、俺は思わず言葉に詰まった。

いや、これが『怪異』である事は分かっている。今日の前にいる生き物が人間ではないことが直感でわかるが、果たしてこれはどうなのだろうか。

いくら『怪異』と言えど、これほどの傷を負つては流石に命に関わるのではないか。

「だいたいどうぶ……なのか……?」

女との距離は大分離れているが、それを考慮した声量で言葉を投げかける。

女の返事はない。

ただ一つ分かったことは、ゆっくりとこちらに向かつてくる女の体が、小刻みに震えているということだった。

片足を引きずりながら、女は一步一步近づいてくる。俺は思わず後退しようとする足を、無理やり押しとどめた。

ついに、女の全身が蛍光灯の下に躍り出た。

遠くからも見て取れた傷はより痛々しく存在を主張し、床にも届きそうな銀の髪は

爛々と光を放つ。

その姿は、ゾツとするほど美しかった。顔を構成するパーツは、完璧な比率で整えられた彫刻を連想させる。豊満な体はやはり生きているのが不思議なくらい損壊しており、大量失血によるところもあるのか、衣服の端から覗く肌は生きていとは思えないほど白く、所々に鮮血が飛び散っていた。

そして、頭頂部。

一対の獣の耳が生えていた。

髪の色と同じ、銀の毛並みの耳。

それが、わずかに震える彼女の体と一緒に、びくびくと痙攣している。

安い作りの贗作ではない。明確な人間との相違点を目視した俺は、鋭く息を飲んだ。

「やっぱり、お前……『怪異』……」

ついに、俺は膝から力が抜け落ちるのを感じた。ドスンと尻から地面にへたり込んで、目の前の現実を反芻するために、呆然と時間を食い潰す。

ようやく俺の頭は『パンク』することができたようだ。

「……貴様……」

女の震えが大きくブレる。

その震えが彼女の『怒り』に起因するものだど気付いたのは、そのすぐ直後だった。

「貴様がアアアアあああああああ!!?」

ボゴン!!?

と、筋肉が内側から急激に膨張し、女の右腕が自身の胴回りより太く肥大化する。爪が伸び、銀の体毛が生えたその腕は、まさに獣のそれである。

怒りの咆哮とともに、駅構内には暴風が吹き荒れた。風は俺の髪をかき乱し、服の裾をなびかせる。

トンネルの中には、けたたましいサイレンのような反響音が鳴り止まない。

本当なら、俺も絶叫して逃げ出したいところだが、今や腰が抜けて立ち上がることもできない。

女が唸り声をあげながら、片足を引きずってこちらに近づいてくる。右腕はミシミシと軋んだ音を上げ、ありったけの膂力がそこに凝縮されていくのが目で見ても分かった。

もう、俺が何をされるのかは明白だった。

「待て……待て待て待て待て! お前は何か勘違いをしてる!」

この女と、俺は確実に初対面だ。

ここまで印象的な見た目の存在を、俺が今まで忘れてはいるはずもない。

だがたつた今、俺は初めてあつた女に、殺されようとしている。

何故、何故俺を殺す。

何故そんなに憎しみが込められた眼で俺を見る。

情けない話だ。ここまで追い込まれているのに、まだ腰に力が入らない。自分はきつと往生際が悪い方だと思っていたが、いざ現実に『死』を目の当たりにした時は違う。負け犬根性が染み付いてしまっていたのだろう。

「俺は何もしてない！ あんたのその傷は——……！」

当然分かりきっていた。

言葉を交わす気など、相手には毛頭無いことを。

問答無用。

犬歯の鋭い歯を食いしばって。

美しい相貌を険しく歪めて。

無慈悲の一撃が放たれた。

風船が割れるかのような、軽快な炸裂音が反響する。

「……あ、」

ぼやけた視界で俺が最後に捉えたのは、宙を舞う、無数の赤い光。

小さい頃どこかの河原から見た、大きな花火のようなそれが、蛍光灯の光に透かされてキラキラと光を放っていた。

嗚呼。

キレイだな。

それが、バラバラに弾け飛んだ俺の五体だったということを知るのは、俺がこのまま、一度死んだ後の話だ。

其ノ貳

瞼の隙間から差し込む光が痛くて、俺は目をを覚ました。

大の字になって寝ていたらしい。

思わず腕で両目を覆ってから、あやふやだった意識をゆっくりと鎮めていく。

……何だったか。

確か……俺は……。

「!?」

濁流のように押し寄せてきた記憶の破片が、たちまち頭から溢れ出す。まるでバネのついた玩具のように、俺は上体を跳ね起こした。

男！

女！

怪異！

化物！

そんな単語が頭蓋の内側でひしめき合って、めきめきと骨を軋ませる幻聴すら聞こえる。

呼吸が、上手くできない。

「一体……何が起きた……!?」

とりあえず落ち着け。落ち着くんだ。

辺りを見渡すと、そこは意識が途切れる前と変わらず地下鉄の駅構内だった。依然、人は俺以外に誰も居ないし、電光掲示板は真つ暗で機能していない。

ブツブツと震える声で、自分でも聞き取れないほど小さく独り言を呟きながら、膝を立てて立ち上がろうとした時、ぬるりとした何かに足を取られ、肩から床に激突した。

「——ッなんつ……だ……コレ」

血だまり。

床一面を染め上げる赤黒い液体。その衝撃が、肩の痛みなどすべて吹き飛ばした。

正円に拡がったそれは、ホームの際からはみ出し、線路へと滝の様に滴っている。

いや、それだけじゃない。

もう一度しっかり周囲を見渡せば、血飛沫はありとあらゆる場所にこびり付いていた。

自動ドア。

壁の広告。

ベンチ。

最早考えるまでもない。

これらは全て、俺の血だ。

記憶が途切れる最後に見た光景。あれはやはり、バラバラに引きちぎられた俺の体だったんだ。

「うっ……!!?」

そう認識した瞬間、抑えきれない不快感が喉から込み上げて来るが、なんとかそれを飲み干す。

余計に上がってしまった息を整え、ようやく『まとも』な平静を取り戻したのは、それから数分後のことだった。

ぐるぐると右肩を回す。

特に異常もないので、今度は左肩。

そうやって全身の関節の駆動を確認してから、俺は首の回る範囲で目立つ外傷が無いかを調べた。

これも無し。

……バラバラになった体と同時に、衣服も治ったのか……。

俺の体に付着していたのは、先刻横たわっていた血だまりの染みだけだった。

そうだ。

俺は悪い夢でも見ていたんだ。

これはどこかのテレビ局のドッキリだ。

そうやって無理やり自分を納得させようとも考えたが、それも不可能だった。

そもそも、何があつて千葉県在中の一般ぼっち民がドッキリの対象にされるだろうか。

ズボンのポケットを探ると、カサリと音がする。雪ノ下陽乃さんから貰った、彼女の電話番号が記されたレシートだ。

生憎これで、この一連の超常現象は現実だと、ほぼ正解に近い証明がなされてしまった。

雪ノ下陽乃は実在していて、

俺は地下鉄を使い、

怪異に巻き込まれ、

男と出会い、

女と出逢い、

一度バラバラの肉塊になって、

何故かこうして元に戻った。

くそ、頭がクラクラする。

ふらつく視界で真っ赤に染まった足元を見ると、俺はある違和感に気づいた。

半ば固まりかけた血の海の上に、後から何か引き摺られた様な跡がある。それは、辺りを埋め尽くす赤の例外に漏れず、真紅の線となって、ホームを超えた向こう。線路が続く暗いトンネルの奥に続いていた。

言い知れない恐怖を感じる。

きつとこの奥には何か居て、それは俺の理解の外にある存在だ。

しかし、俺は意を決して、ホームの端に備え付けられた鉄の柵を乗り越えた。懐から

携帯を取り出し、懐中電灯モードをオンにする。少し進むとホームはそこで途切れており、真つ暗なトンネルの奥に、線路と埃まみれの脇道が続いていた。

携帯の光を当てて確認すると、血のラインもまたそれに沿って引かれ、遠く闇の向こうに消えていた。

直感的に推測する。

きつと、『あの女』が通つたのだ。

先刻の肉片花火——酷いネーミングだ——の光景が脳内でフラッシュバックして、肌にしわりと汗が滲む。

確かに俺は、一度あの女に殺された。本来ならもう二度と関わりたくはないし、関わるべきでもない。今まで通り、嫌なことには背を向けて、無かつたことにしてしまうのが最善だ。

だけど。

それだと、一度死んだ俺がなぜ生き返つたのかが謎のままだ。

俺は家族に対して、単純な損得感情で行動したりはしない。迷惑かけても、かけられても、恩着せがましく対価を求めたりしない。それが俺たちにとっての普通であり、日常だから。

でももし、相手が何でもないただの他人なら。

俺だってそれなりに思うところがある。

息を飲んで、俺は一步を踏み出す。

血を頼りに。

歩く。

歩く。

歩く。

五分か、

十分か、

方向感覚もあやふやになるほど進んだ先、壁に無造作に取り付けられた扉が見えた。

見ると、床の血痕もその扉の下に吸い込まれている。

ドアの前に立ち、俺は大きく深呼吸をした。

落ち着け。落ち着けよ。

もうさつき一度死んでるんだ。流石にその直後また死ぬなんて展開は無いはずだ。

少なくとも漫画や小説ならまず無い。

心でそんな減らず口を叩いてから、俺は勢い良くドアノブに手をかけ、わずかな逡巡

もしないようそのまま一気に引いた。

ギィ、と錆びた蝶番がわななく。

中には、トンネルと同じ密度の闇と、

その奥にぼんやりと浮かび上がる、二つで一对の眼光があった。

そつと室内に入り、扉の横に備え付けられた電気のスイッチを手探りで見つけ出し、押した。

一瞬にして、オレンジ色の人工的な光が部屋を照らし出す。そこは、使い古された狭い用具室のようだった。

「……来るのが遅い、この痴れ者が……」

既に予想していた、光る双眸の正体。

銀髪の女は、部屋の奥に置かれた鉄の棚に背中を預けて、正面から俺を睨みつけていた。

深緑色の軍服を着た全身からは力が抜けきっており、両足を地面に投げ出して座り込んでいる。

血は未だに止まらないらしく、全身の至る所から赤い筋となつて垂れ落ちて、ホームに残る俺のものとは別に、室内に新たな血だまりを形成していた。

彼女の口ぶりは、まるで俺がここに現れることをあらかじめ予期していたかのよう

だ。やはり、俺が置かれた現状について何か重要なことを知っているのか。

というか、いきなり高圧的だなオイ……。

お前には色々聞きたいことがあるんだっつもの。

「……………どうした、何を黙りこくっている……………」

気付けば、額から滴り始めるほど汗をかいていた。緊張か、恐怖か。まるで喉だけが金縛りにあつたかのように、せり上がってくる言葉が詰まってしまう。

強がつてみたものの……………やっぱり怖いものは怖いな。

とうとう痺れを切らしたのか、女はそぞつとするほど美しい相貌をくしゃりと歪めて、感情のままに喚き散らした。

「『親』を助けるのが、『仔』の使命であろうがっ!!?!!? はようせんか!!?!!?」

その気迫が、ビリビリと俺の全身に打ち付ける。女の口から、声と共に赤黒い液体も飛び散った。

正直言っていることは殆ど耳に入らなかつたが、恐怖と畏怖が体を勝手に突き動かし、反射的に、俺は女に駆け寄っていた。

しかし、近づいた方がいいが、そこから何をしたものか分からない。

「あ……………つと……………」

女は鋭い犬歯を剥き出しにして俺を睨んだままだ。また怒鳴られるよりはマシだろ

うと思ひ、意を決して本人に尋ねることにした。

「俺は……何をしたら……」

案の定、俺の言葉を聞いた女は息を吸い込んで何かを叫ぼうとするも、途中で苦悶の表情を浮かべて黙り込んだ。

傷は相当に深いようだ。

「我輩の傷口から、血を吸い出せ……」

隙間風のように弱々しい声で、女はそう言った。体力的な問題もあるのだろうが、その声色はどこか後ろめたさも孕んでいるように聞こえる。

え？　　というか何それ。こんな超絶美人の肌に吸い付けって？

どんなご褒美ですか。

「傷が……傷が塞がらないのだ……。おそらく毒か何か弾丸に仕込まれている」
なんだかよく分からないことを言っている。

そう。

結局のところ、何がどうなっているのかを俺は全く把握できていないのだ。

何事も、訳が分からないまま事を成してしまうのは軽率である。……いや、ここまで来てしまった俺が言えたことではないとも思うが。

場合によっては『この女』をここで助けられないことが、現在俺が置かれた状況と謎を解

決する最適解という可能性もある。

俺が次に取るべき行動について考えていると、痛みに耐え兼ねたのであろう女は苛立たしげに、自分の足先あたりにしやがみ込んだ俺に対して、あらん限りの憤激をぶつめた。

「嗚呼、糞っ!!?」

鈍間な奴め!!?

はよう我輩の服を脱がせよ!!?

毒

を吸い出せ!!?

患部も見んで何が傷の処置だ!!?」

喚き散らす口元から飛び散る血の量は、先ほどより多くなっている気がする。

なんだこの女……。身動き取れない癖になんでこんな偉そうな。俺が性犯罪者とかだったら今頃どうなっていたことやら。

というか何気に爆弾発言も聞こえた。ふ、ふふふ服をぬぬぬ脱がせる?

できるわけないでしょ、童貞にはハードル高い。

別に俺がヘタレとかそういう話ではない。

さつきから口ばかりで、思いの外危険度が低いと判断した俺は、自分でも知らないうちに気が大きくなっていったのか。相手の要望を無視して、私情を優先することにした。

「その前に、お前に聞きたいことがあるんだが……」

女の耳、頭頂部に生えた美しい毛並み——最も、今は血まみれで見る影もない——の獣耳が、ピクリと揺れた。

「喧しい!!?　　まずは我輩が先だ!!?」

生意気を言うな!!?」

ヒステリックに怒鳴り散らす女。

しかし、これほどまで口はエキサイトしているというのに、首から下は変わらずピクリとも動かしていない。どうやら、毒とやらで身動きが取れないのは本当のようだ。

俺は、一連の不思議体験で募った恐怖と苛立ちをぶつけるように、ありつたけの気持ちで引きつった笑みを浮かべ、見下すように女を見据えた。

「ものを頼むなら、それ相応の態度つてものがあるだろ」

初めて、女の顔が攻撃的なものから、眉を八の字に歪めた悲壮なものに変わった。

きつと今彼女の中では、苦痛と矜持がひしめき合っていることだろう。

だが、俺にも譲れないものがある。一度殺されてやってるんだから、それくらいの権利はあるはずだ。

しかし、譲れない何かがあつたのは相手も同じだったようで。

「うう……うううう……」

女の口から漏れる苦悶の声がだんだんとその質を変えていく。

やがてそれは明らかな嗚咽となり、

遂には、号泣へと変化した。

「うええええええええ……」

みつともなく泣き散らしてしまおうのか。
それでは、ただの人間じゃあないか。

……はあ。

俺が誰かを心配するなど、家族以外にここ最近あっただろうか。

「……分かった、俺が悪かった」

最終的に折れたのは俺だった。

ほら、なんかもういいかな、的な。

ドSキャラはどうにも肌に合わない。

女の子に泣かれちゃうと、自動でお兄ちゃんスキルが発動してしまおうのは、こんな状況でも平常運転か……。

啜り泣く女にさらに詰め寄って、胸元のボタンに手をかけた。なんかいかかわしい感
は否めないが。

「……………」

女の方も、突然の変化に驚いたのか、一瞬痛みを忘れたかのように茫然としていたが、直ぐに静かになった。俺を受け入れる体制になったのだろうか。

頬が少し熱くなるのを感じながら、一個、また一個とボタンを外していく。

乳房が溢れない程度に——本当はめっちゃ見たい——胸襟を開くと、現れたのはシャ

ツではなく、そのまんまの素肌だった。こいつ、裸軍服とかレベル高いっすわ……。

まず目がいくのは、その肌の白さ。生きているとはとても思えない、神々しいまでの美しさに頭がフリーズするが、生々しく刻まれた傷跡が即座に俺を現実に取り戻した。

絶え間なく流れる血のせいで見えにくくなっている傷口は、円形の穴であることが辛うじて分かった。間近で見ると生々しい肉の断面に思わず目眩がする。

右鎖骨の下。

胸の中心。

左脇腹。

臍の真上など、

同じように赤黒い虚淵が顔を出している。これ普通に当たったら即死のところとかあるんだけど……。

その道のプロとかでは無いから、なんとなくとしか分からないが、恐らくこの女を傷付けた武器は銃火器の類、散弾銃か何かだろう。

今一度女の全身を眺めると、ざっと見ただけで上半身は四、五箇所被弾しているが、下半身の目立つ外傷は右太腿の一箇所だけだ。

優先すべきは、やはり上半身。

「後から文句言うなよ……」

何故わざわざ『吸い出せ』と言ったのか、その根拠までは分からない。ただそう言うからには、何か正当な理由や考えがあるのだろう。

命を救う緊張感とわずかな羞恥を抱いて、

俺は女の胸元、豊満な乳房の谷間の傷口に唇を当てた。

「……………こんなもんか」

結局。

上半身で五ヶ所、下半身で一ヶ所。弾丸が体内に残ったままの傷があった。いつそのこと傷口に指を突っ込んで強引に弾を引きずり出そうかとも考えたが、お互いのS A N

値が持ちそうにないのでやめた。

天才外科医、ヤングヒキガヤ・ハチマン。

……初回で医療ミスとかやらかしそう。

口の中に残った鉄の味がする唾液を最後に床に吐き出して、口を拭う。

よし、こんなもんだろう。

毒だと言うからには、俺が何かの間違いで飲んでしまうことも避けるべきだしな。

パーカーの袖と口周りは血まみれのままだけど。

要領を得てからは正直傷のことより、強めに吸った時の痛みを堪える女の方が俺的にはヤバかった。美人を見るたび毎回言っている気がするが、やはり美人は何をして魅力的である。

俺が一息ついて腰をあげると、小さく、本当に小さく、女が何かを呟いた。

「……ありがとう……」

掠れていてほとんど聞こえなかったし、俯いた顔は彼女の長い銀髪に隠れて伺えないが、大体どんな顔をしているかは分かる。

……だから、キアラにもなさそうなことするなよ、ギャップ萌えが激しいから。

「別に、気にするな」

なんだか気恥ずかしくなって、俺も同じくらい小さな声でそう答えた。

最後の患部。

右太腿の傷を、女の軍服を千切つて作った包帯で覆う。そのまま見よう見まねでぐるぐると巻きつけて、とりあえずの処置を終えた。

結果として女の上半身はほぼ全裸に近く、大変俺の体——どことは言わないがな——に悪い装いとなっている。

「ぬし、名はなんという」

涙も血も流しきった女は、気を取り直した調子でそう問いかけてきた。顔には、本来あるべきだった凜とした美しさも戻っている。

俺が突然のことに言葉を詰まらせていると、女はさらに口を開いた。

「先刻はまあ、我輩も取り乱していた。ぬしの名前を聞きたいのだ。……それとも、先に謝れと言うのなら……どうしても……言うのなら」

女を真正面に見据えた位置。出入り口扉に背中を預け、床に胡座をかいた俺の今の視線は、女とほぼ同じ位置にある。

俯き気味に、やはりまだプライドが捨てきれしていないのか。そんな提案をする女の顔は翳っていた。

……まあ、俺も調子に乗って、変に気が動転していたということもあるし、そもそも女に謝られること自体あまり気持ちの良いものでは無いしな。

「別に、気にするな。つーかお前ももうさっきのことは忘れろ、俺はもう忘れた」

そう言うと、俯いた女の顔が、わずかに微笑んだのが見えた。

なんだ、なんかおかしかった？

もしかして口周りの血が髭みたいになつてるとか？

「なんというか……ぬしは我輩が今まで出会った人間の中でも、初めて見る種類なのでな。ついおかしくなっちゃった」

「まあな、ナンバーワンよりオンリーワンをモットーに生きてきたもんで」

「そら、そういうところだ」

「……うっせ」

そう言った女の顔があまりにも美しく、俺は思わず目線を斜め下に逸らす。

やめろよ美人に免疫無いんだから。危うく勘違いして告白して振られた上にまた殺されるところだった。つーか振られるのかよ。もつと言うと殺されちゃうのかよ……。自分の死すら既にネタとして昇華した俺のバイタリテイを誰か褒めてくれ。

「我輩の名は、『白面金剛隠神刑部四狼正宗之薊姫』。『人狼』である」

女は、琴の音のように晴嵐な声色で、自身の口上を名乗った。

ちよ、え？

長い長い長いって。俺そんな瞬間暗記能力とかなないからね。

好きなようにって、しろうまさむねく位からしか覚えられなかつたんですけど……。

……というか、それよりも。

「『人狼』って、どういうことだ……」

「言葉通りだ。我輩は『人狼』の姫。悠久の時を生きる『怪異』なのだ」

「……なるほど」

全然なるほどじゃねえし。

……まあ、今さらって感じはあるけどな。はじめから人間じゃないことは分かりきっていたし。

さて、他に何か聞かなきゃいけないことは……。

「あつ!!?」

「なつ、なんだ脅かすな」

びくりと体を揺らす、しろうなんたらさん。

さつきまで泣いてる姿を見てた所為もあつてか、お姉さん系の美人なのに何処か年下みたいなおどおどした雰囲気も感じてしまう。

さつきの話が本当なら、こいつは俺の何歳年上なのだろうか。

「そうじゃなくて、俺の体。一回バラバラにされただろ、お前に。俺はあの時死んだのか?」

すつかり治っていたから思わず忘れかけていたが、ほんの少し前まで、俺はまさしくきたねえ花火と化していたのだ。

「今までの口ぶりからすると、俺を殺したのもお前だが、直したのもお前だろ。俺に何をしたんだ」

「なんじゃ、そのことか」

なにその軽い反応。

怪異と人間の異文化ギャップなのか、単なる年の差からくるジェネレーションギャップなのか。

いや、今は相手の話を聞こう。

「そうだな。……我輩が治したというよりかは、ぬしが治したと言った方が良いかもしれん」

「？」　　いまいち話が見えてこねえな」

「ぬしは、ついさつき我輩と同じ『人狼』になったのだ」

「……はい？」

なん、だ。

それは。

「我輩が、バラバラになったぬしの肉から頭と心臓を見つけ出して、強引に『眷属』に変質させた。つまり今のぬしは我輩にとつての『仔』だと言える。正直上手くいくかは神のみぞ知る、と言ったところだったが……良かったな、ぬしは幸運だ」

「それは……本とか映画とかでよくある、狼男に咬まれるとそれも狼男になるっていう、あれか」

「左様。我々は人間の信仰、願望から生まれる存在。人間が定めた在り方を持つのは至極当然であり、それこそが自然な形であろう」

「じゃあ俺は今、満月の夜に毛むくじやらになって、この女と同じように銀製のものにめっぽう弱いとか、そんなことになっているのか。」

全然自覚ないんだけど。

だけど。

そうか。

今の俺は、もう人間ではないのか。

「まことに癪ではあるが、『人狼』が持つ不死性は、総合的に似たような性質を持つ『吸血鬼』のそれと比べれば多少見劣りする。だが我々には、奴らを上回る身体能力と、生命活力がある。今回ぬしが再生に成功したのは、そのことが大きいかもしれん」

「……」

さりげなくシヨッキングな新事実に、俺の心はぐらんぐらん揺れ動いていたが、今はそんな場合ではない。真っ先に、はつきりとさせなければいけないことがまだまだある。

「良かったな。ぬしの前に現れたのが、あの高飛車金髪吸血鬼ではなくて」

「……おう」

誰のことを言っているのか全く心当たりは無いが、しろうなんたら苦虫を嘔み潰したみたいな表情から察するに、その人物とはあまり上手くいっていないようだ。

「まあ、そんなことはいいんだ。じゃあ次に聞かすが、お前は何で俺を殺した。後から生き返らせるくらいなら、もつとやり方があったんじゃないのか」

俺はついに、自身が最も知りたい謎についての話を切り出した。

話せば話すほど、俺はこの『人狼』がそこまで悪い奴には思えなくなっていく。ダメだな、こうやって俺は悪女にも騙されるのか……。嘘が見抜けるサイドエフェクトが欲しい。

しかし、待てども待てども、しろうなんたらは重苦しい雰囲気のまま言葉を発しない。俺の方から呼びかけようとした時、ようやく彼女は話を始めた。

「……男が、この町に訪れた」

しろうなんたらはそう言って、天井を仰ぎ見た。たつたその一言だけでは、いったいどんな話が始まるのかまるで想像がつかない。これから語られる話は、いつ、どこで、俺の死に繋がるのか。

わずかに細められた彼女の双眸には、いったい何が映っているのだろうか。

——しかしだな、と上を向いたまま、可憐な唇が音を紡いだ。

「ここから先を聞いたからには、ぬしにはやり遂げればならぬ大きな使命が発生するやもしれんぞ」

俺に視線を戻した彼女の表情は、いつの間にか恐ろしく冷たいものになっていた。

思わず息を飲んだ俺に向かって。

彼女は。

——ある人間を殺して欲しいと、

そう言った。

其ノ參

それから。

時に凜と眉を顰め。

時に少女のように笑ひ。

時に乙女のように哀しみ。

そして少しずつ。

薊——正直、本名は一度聞いただけじゃ殆ど覚えられなかつた。俺が女性を名前で呼ぶなど、特例中の特例だ——は、自身とその男との因縁について、断片的にだが話してくれた。

『カテゴリーキラー』

俺が薊に殺される前。

あの時俺と出会ひ。

他愛の無い言葉を交わし。

去り際に握手を交わした。

よれよれのロングコートに目深くハットを被つた、ラテン系の男。

あいつこそが、件の『怪異ハンター』だったのだと。

彼女の大事なモノを、奪っていったのだと。

毅然とした声色で、彼女は俺にそう告げた。

「世の中には、我々『怪異』を殺すことを生業とする人間、所謂『専門家』が存在する」
「それは……なんだ。まさかとは思いますが、ヴァンパイアハンターとか、陰陽師とかが、世界には実在してることか」

思わずそう聞き返してしまった俺は、すぐに現実を認識し直す。

何を今更驚いているのだ。

今日だけで一体どれだけの『異常』に出くわしたとか。

今日の前で俺に、白い肌を覗かせて、ほぼ生まれたまの姿を晒している彼女こそ、そんな『異常』の具象化そのものだろう。

「左様。奴らは我ら『怪異』同様、超常的な力、技術を振るうことが多々ある。例えば、今我輩の体に埋まっている銀の弾丸。先刻、ぬしは何度かこれを無理やり引き抜こうと試みたかも知れんが、無駄だ。これは『持ち主』以外の意思では絶対に”抜けない”。そういう作りになっているのだ」

……うへえ。

そりやあ、挑戦しないで良かった。

危うくSAN値ばっかり浪費して徒労に終わるところだったのか。

ふと、鉄柵に背中を預けた薊が、渋面でむずむずと体を揺すっていることに気付いた。何？ お花が摘みに行きたいんですか？

この前同じことを小町に言ったら暫く口聞いてもらえなくなった。やめてくれ妹よ。お前と話せなくなったら、いつしか俺の声帯は退化して無くなっちゃうまである。

俺は怪訝な表情を浮かべ腰を上げて、薊の方へとゆっくり近づいた。

「どうした。まだ傷が痛むか？」

「いや、何。そろそろこの体勢が辛くなってきてな。少し横になりたいのだが」

「……分かった。じゃあ俺がどつかから適当に枕代わりにでもなりそうなものを――」

薊が、小首を傾げる。

「何を言う。もうこの場にあるではないか」

うつそーん。

このタイミングでなぞなぞですか。

俺そういうセンス無いから勘弁して欲しい。

俺が暫く本気で考え込んでいると、薊は堪え切れなくなったのか、小さく吹き出してからコロコロと笑った。

「ぬしの膝を貸してくれ。そう言っているのだ」

そういう彼女の姿は、『怪異』ではなく普通の女性に見えなくもない。なんとも人間らしい感情表現をしているように感じた。

……この女。

こういうこと言ったりするから、余計に憎めなくなるんだろが。

しかし、過度なボディタッチは八幡先生感心しませんねえ。そうやって今日も世界の

どこかで、罪なきチェリー達がビッチの毒牙にかかるのである。

「……み、みやまあ良いけどよ」

かく言うチェリー（俺）も、全身全霊で挙動不審を演出してしまった。俺は薊に習って、彼女のすぐ右隣で鉄柵に背中を預け、そのまま地面にぺたんとして座り込んだ。

なんか返答が凶らずもクワガタの名前みたいになってた気がする。

俺の言葉を聞いた薊は、「左様か」と短く告げて、ゆつくりと上体を右隣の俺の方に傾け、そのままストーンと俺の太腿に頭を乗せた。

「うむ。男の硬い膝もまた乙だな」

……なにこれ死ぬほど恥ずかしい。

世のバカツプルどもは、よくこんな行為に及べるものだ。

頬が急激に熱を帯びるのを感じながら。俺の目に、薊の背後——長い髪に紛れて今まで気付かなかったが——から生える、ふさりとした尻尾が映った。髪と同じ銀の毛並みは、蛍光灯のオレンジを反射して、加熱した鉄塊のような、暖かな光を放っている。

マジか。

めっちゃめっちゃモフりたい。

でも、何事にも手順ってものがあるよね！我慢よ八幡、我慢我慢☆もし彼女の気に障ってまたぶつ殺されたりしたら、たまったものではない。

暫く俺が所在無さげに両手を空に漂わせていると、何かを促すように薊が小さく唸った。よく分からないが、とりあえず右手で頭を撫でてみる。すると薊は「ふん」と小さく息を吐いて、何やら満足げな笑みを浮かべた。

うちの飼ひ猫も、これくらい俺に愛想がよければなあ。

「……で、話の続きをしてくれよ」

「おお、そうだった」

だから、なんかいちいち反応が軽いんですけどこの人。

大変気持ち良さそうなお顔をしておられるのは結構だが、このまま寝たりしないでくれよ。

「我輩は、奪われたモノを取り返すために、遙か遠い地から『あの男』を追い続けていた。結果として、怒りに我を失っていたことと、ほんの少しの油断が元で、このような深傷を負ってしまったが……本来なら、もっと迅速に奴を殺せるはずだったのだ」

はずだった、という薊の言葉に、思わず俺は眉をひそめた。そういうからには、やはり事情が変わってしまうような何かが起きたのだろうか。

「ただ、脆弱な『人間』とはいえ奴は『専門家』。圧倒的な力をもつ『怪異』に搦め手で勝利することは、まさに得意中の得意であった。次々繰り出される小癩な技と、どこまで追っても逃げるばかりの奴に苛立ちを募らせるばかりだった我輩は、いつの日かそん

な技ですらあえて正面から突破するようになっていた」

そして今回、またしても逃げられたということか。それも壮絶なるカウンター付きで。

これで確かに、『カテゴリーキラー』が通り過ぎた直後、同じ方向から後を追うように彼女が現れたことにも合点が行く。

しかし、何だ。

馬鹿かコイツ。

口には出さないが、俺は思わずこめかみに手を当てた。

そんなことでは、まさに奴の思う壺だ。さぞ仕事がし易かったろうに。こういう人間を舐め腐った態度の成れの果てが、今の満身創痍、最早自分では腕一本動かせなくなつた現状だと、こいつは自覚はしているのだろうか。

どんなに小さな敵が相手でも、ほんの少しの油断が命取りになることもある。いい教訓になるな。

そんな俺の心境も知らずに、膝の上から俺の顔を見上げて、薊は話を続ける。

「ぬしはこの地下に入る前、空を見たか？」

「……何が言いたい？」

別段夜空を見上げたりはしていないけど、おかしいことなどは無かったように思うんだが」

「今日は本来なら満月だ。だが、後で確認してくると良い。もし雲が出ていなければ、今の空には月そのものが存在していないことに気付ける」
空から、月が消える。

その言葉を受けて、思ったままの光景を夢想する。

そんなことが、人間に可能なのか？ 普通に信じられないんですけど。

「いや、でも、それも『カテゴリーキラー』の、仕業なのか……」

顔が思わず引きつっていることが、自分でも分かった。

「広域の結界を張り、その内領域の人間を払い空から月を隠したのだろう。奴の専門は『夜の怪異』だ。我ら『人狼』や、『吸血鬼』を始めとする存在、つまりは夜にその真価を発揮する怪異の退治こそ、奴の専売特許」

……つまりどうということだつてばよ？

『夜の怪異』と月の有無がどう関連しているのかいまいち釈然としない俺に、表情から全てを察した薊が溜息交じりに説明を始めた。

なんだその『やれやれ』みたいな感じ。

知らんわ。

「伝承通り、人狼の基礎能力は月の満ち欠けに依存する。満月の時が最高潮、逆に新月の時は最悪だ。ぬしは人狼になったばかりだからまだ分かりにくいかもしれないが、本当に

天と地ほど差だぞ。常時無敵状態と、常時二日酔い状態くらいに違う」

分かるようになりたくないなあ、それ。

しかし聞く限りだと、彼女が今言ったのはあくまで精神面での話なのだろう。

では、実際のパフォーマンスに影響する部分、物理的な身体能力の面はどうなのか。疑問に思った俺は、思ったままの質問を薊に投げかけた。

うむ、と唸る薊。

「一概にこうだ、とは言えんが……我輩はムラっ気がある方だったからな。今の我輩の体感で表すなら……膂力、嗅覚をはじめとする全能力が、九割減といったところか」

めちやめちや弱体化してるじゃねーか。下方修正半端ねえ、運営しつかりしてくれ。

しかしなんだお前のその『さもありません』みたいな顔。もう少し気にしなさいよ……。

「奴はどちらかという対『吸血鬼』の方に技能の重きを置いていた。つまりは現在この街に張られている結界は、元は『吸血鬼』に使う予定のものだったのだろう。本当に不甲斐ない話だ……。この街を通つたのも、ここより少し先の地で同業者たちと合流し、ある『吸血鬼』を殺すことが目的だったらしいからな」

それを聞いて、俺は『カテゴリーキラー』と交わした言葉の断片を少し思い出した。

確かに、直江津に向かうだのなんだのと言ってたわ。

アイツは線路を歩いて向かったんだらうけど、普通に乗り物に乗ろうとか考えなかつ

たんだろうか。同業者の内輪で決まっているルールでもあるのか……。

暫く宙を睨みながらそんなことを考えていると、俺はある重大な疑問を忘れていることに気付いた。

「そろそろ、俺が一番疑問に思っていることを聞いても良いか？」

ここからは、俺も心して挑まなくては。

先ほどまでと若干声のトーンを変えた俺に、薊も訝しげに眉を顰めた。

「なんだ」

短くも鋭く告げられたそれに、俺もより一層語調を強くして返す。

「お前はあの時、なんで俺を殺した」

核心に至る疑問。

これを知らなければ、俺のこの女に対する姿勢も変えなければならぬと、そう思っていた。

まだ出逢ったばかりの彼女の内面について語るのは気が引けるが。今の俺には、彼女が無益な殺生を犯すようには思えないし、そうであつてほしくなくとも感じている。

だが、彼女との会話には、節々に少なからず人間を下に見ているかのようなニュアンスも見受けられることも事実であつて。

少なくとも今の俺には。

彼女を『無罪』だと断定しきることは、まだ出来ないのであった。

「……」

薊は、直ぐには答えを提示しなかった。

どんな思い——或いは負い目——を彼女が抱いていたのか、それを表情から察することは俺にはできなかつた。

それでも。

暫く続いた居心地の悪い沈黙を超えて、薊はゆっくりと口を開いた。

「我輩がぬしを殺してしまつた時。その時我輩は、何もぬしを『ぬし』だと認識して、殺したわけではない。意味はわかるか？」

「……分かる、言いたいことはだいたい分かるが……」

まだ、納得には至っていない。

俺は、続く言葉に耳を傾ける。

「我輩の目に映っていたぬしは、ぬしの姿ではなかつたのだ。目深の帽子に、着古したコートを羽織つた、壮年の男。まさに『カテゴリーキラー』の姿そのものだった」

……ああ、なるほどな。

くそ、その言葉で全て合点がいった。種が割れてみると、なんともしようもない話だ。今はただ、少し過去の俺が、哀れで、愚かで、不運であつたことが腹立たしい。

「俺はアイツに、一杯食わされたってことか」

何かを仕掛けられたのなら、それは恐らく握手の時。きつと『カテゴリーキラー』が、俺の全身或いは存在そのものにトリックを施したのだ。

奴は俺を、使い勝手のいい時間稼ぎ程度にしか思っていないかったのだ。

負傷して、正気でなかった薊から逃げる為に。俺の姿に偽装を施し、『カテゴリーキラー』に見せかけた。

空から月を隠すようなやつだ。そんなことお茶の子さいさいだろう。

「……」

あの男に絡んだ様々な思惑が、俺の中でぐるぐると渦を巻く。

その殆どが、黒く濁った攻撃的なものであったことに気付いたのは、薊が話を再開したのと同時だった。

「これで納得がいったか？」

「……ああ。ありがとう、もう十分だ」

納得はした。

もつと言えば、今は既にふつふつと沸き立つ溶岩のような激情がそこにはあった。

「さて。……まで話をしたが……」

膝の上から俺の顔を見上げた薊の表情が、一瞬ギョツとしたものに変わり、直ぐに恍

惚とした笑みになる。

今の俺の顔は、きつと酷いものになっていることだろう。鏡がないから分からないが、口元は固く一文字に引き絞られ、目元なんかは普段より更に腐っているはずだ。

彼女がそんな俺を見て笑ったのは、——予定通り——だったからだろうか。

「もう大体見当はつくだろう。動けぬ我輩の代わりに、ぬしには頼みたいことがあるのだ」

薊の口から、鋭い犬歯と、ぬらりと光る赤い粘膜が覗いた。

どこまでも扇情的で、底無しに美しい彼女が持ちかけたその『依頼』は、まさに悪魔の囁きの如く。

ぼっかかり空いた俺の心の穴へと吸い込まれていった。

地下鉄の階段を登り切り、地上の世界に出た。

充電が切れる寸前だった携帯を見ると、時刻は深夜零時丁度。

何時間かぶりの新鮮な空気を肌で感じた俺は、ふと薊の言葉を思い出し、空を見上げた。

やはり、そこには煌々と輝いているはずだった月の姿は無い。

……本当に、ヤツは街全体にこんな結界を張ったのか。

「さて、どうするかね」

暫く同じ姿勢を取っていたからなのか。首と腰に不快な重みを感じた俺は、それぞれを駆動域の限り左右に捻る。

ゴキゴキ、パキパキと、心地よい音が深夜の街にこだました。

「すまん。少し考えさせてくれ」

「……なんだと?」

薊の顔から笑みが失われ、入れ替わるように明らかな憤懣の意が浮かび上がった。

「あの男は、ぬしを良いように利用して、あまつさえ殺しているのだぞ。死んで当然の屑だ。ぬしには復讐を遂げる権利がある」

「実行犯のお前が言えた義理でもないだろ。それに、もう何百年だか人間をやめてるお前とは違って、俺はまだ産まれたての赤ん坊みたいなもんなんだ。そう簡単に人間の倫理観は捨てられない」

俺は、右手でそつと薊の頭を浮かせて、膝を引き抜く。代わりに、今はただのボロい布切れになった彼女の軍服を折り畳み、枕として俺の膝が元あった場所に置いた。

「知ってるか？」 人殺しは悪いことなんだ」

薊の反応は無い。

ただ、怪訝な表情でじつと俺を見つめるだけだ。

「逃げたりはしねーよ。少し風に当たってくるだけだ」

「……我輩は何も、絶対に奴を殺せとは言っていない。人殺しが嫌なら、交渉なり、決闘なりで、我輩を封じておるこの毒の弾丸を無力化してくれるだけでいいのだ。後のことはすべて我輩に任せてくれて構わない。迅速に事を済ませよう」

「いいや、俺だつてこのまま終わるつもりはない。『カテゴリーキラ』にはそれなりの罰を受けてもらいたく思つてる。だからこれは、あくまで俺の心の問題なんだ」

「……うむ、」

瞼を閉じて、何を思っているのか分かりにくい神妙な表情を見せる薊の様子は、俺と
言う頼みの綱に逃げられまいと必死なようでもなく、そもそも俺が逃げ出すという未来
の選択肢すら見ていないようにも感じた。

……信頼されているのか。

確かに悪い気はしないが、俺には慣れない経験だ。

「……分かった。何とも我儘な我が『仔』だな。だが、今回は許してやろう」

「へいへい。ありがとうございます、お母様」

「小一時間もしたら、戻ってこい。その時改めて返答を聞こう」

やたらめつたら態度がデカイ義理の母(?)を何とか言いくるめた俺は、その場で踵を返して、用具室を出る扉に向かう。

しかし、ドアノブに手をかけたところで、後ろから「おい」と呼び掛けられた。

……なんすか。

「名前。すっかり忘れていたが、まだ聞いてなかったはずだ」

「……ああ、そう言えばそうだったな」

「比企谷八幡だ。悪かったな、お前と違ってあんまり長くないだろ」

「いいや、謝る必要は無い。実に良い名前だ、八幡」

開け放たれた扉の前で、そんなやりとりを交わす。
彼女の瞳は。

室内の電気を消したわけでは無いのに。

まるで、闇夜に紛れる獣の如く。

ゆらゆらと、怪しい光を放っているように見えた。

其ノ肆

人狼が持つ能力について。

俺がよく嗜んでいる映像作品や読み物（大半が漫画）には。

とくに、伝奇物とバトル物を掛け合わせたような作風のものには。

狼男というキャラクターは、最早定番と言つていいほど頻繁に登場している。少なくとも俺には、そんなイメージがある。

泣けるよね、おおかみこ〇もの〇と〇。

シングルマザーって大変。もし俺が念願叶つて専業主婦になつたとしても、あんなにいい母親には絶対なれない。

まあ性別的に俺は母親になれないけど。

……そもそもあれはバトルものじゃありませんでした。

まあ、冗談はさておき。

そんな俺が、まことに勝手ながら考えていた『人狼』の力は、大まかに説明するところな感じだ。

その一、変身能力。

満月を見ると勝手に発動し、自分の意思でコントロールが出来ない。体毛が生え、骨格が組み変わり、理性を失って文字通り『獣』に成り下がる。

その二、身体能力の強化。

単純な膂力、脚力や腕力を始めとしたものだけでなく、狼の特性を引き継いだことにより、嗅覚や聴覚などの『五感』に分類される器官も同様に機能が向上する。

その三、再生能力と弱点。

人間を遥かに上回る治癒能力を誇っているため、致命傷を負って戦闘不能に陥っても、瞬く間に復活する。ただし、銀製の物体による攻撃ならば確実に有効なダメージを与えられる。

結果として、俺の立てたこれらの推測、そのほとんどは的中していた。

唯一、遠からずも近からず、といった感じだったのは『変身能力』について。

彼女。

薊が語る『人狼』の変身能力は、俺が思っていたより格段に自由度が高かったのだ。曰く。

満月を見なくても変身が可能。

多少の反復練習をこなせば、任意の一部分だけの変身が出来るようになる。

理性を失うのは、満月の日など極端に体調が良い日に、必要以上の変身を繰り返した

時などで、基本的には滅多にないこと。

とのことだ。

まあ正直なところ、大まかな説明を受けただけでは心許なかった俺は、実際にそれらの能力を自身の目でちよいと確かめようと、千葉駅前の小さな公園に足を運んでいた。

ちようど息抜きと、彼女からの『依頼』について考える時間も欲しかったところだ。ただボケーッと考え込むよりは、体を動かして有効な時間を使おう。

……今のとても帰宅部の言葉とは思えねえな。

ちなみに、目的地に到着するまで人はガチで誰一人見かけなかった。結界つてすごい（白目）。あと死ぬほど心細かった。

孤独が身に染みるなんて感覚、久しぶりだ。

ふええ……僕だけしかない街だよ……。もしりバイバルできるなら、回避したい過去の黒歴史が多過ぎるな。

「……あつ」

そういえば。

俺は、現在最も頼りになるかも知れない人物と連絡を取れることを思い出した。

雪ノ下陽乃さん。

もし、彼女と落ち合うことができれば。

事態が解決するとまでは行かずとも、少しくらいは改善されるかも知れない。

本当、なんでこんなことに今の今まで気付かなかったのか。自分で自分が許せない。俺は懐から勢いよく携帯電話を取り出して、電源ボタンを押した。

……ん？　でも待てよ。

この結界の中って、電話とかそういう類のやつ通じるのか？

だとしたらセキユリティ低くね？

外部との連絡が取れちゃうなら、それは標的を完全に隔離できていると言えるのか。

……というか。

携帯。

充電切れてるし。

「くそっ！！？」

いつぶりかも分からなかったが、堪え切れない苛立ちに俺は思わず声を上げてしまった。

とことんついてない。

……今に始まったことじゃないけど。

「……よう、」

気を引き締めて、まずは変身から実演を試みる。

俺は、公園の端に植えられた太さ一メートル——あくまで俺の目測だが——ほどの太い木の前に歩いて行き、パーカーの両袖を肘の辺りまで捲った。

少し腰を落とし、重心を沈める。

……ふう。

ていうか。

「どうやったら変身できるんだ？」

うっかりしていた。

俺は藪から知識としての『人狼』を覚えてもらうばかりで、実在の『俺』という『人狼』に関する体感的なレクチャーをまるで受けていなかった。

これじゃあ、いきなり離れて暮らしていた父親に呼び戻され、汎用人型決戦兵器に乗せられた中坊並みに勝手に分らない。

こんなの、こんなのできるわけないよお！

「……力んでみるか……」

自分でもどうかと思うが。

何も分からなさ過ぎて、俺は取り敢えずなんとなくで思ったことを実行に移す。

……こんなんでうまくいったら苦労しないだろうけど。

両腕を体の横につけて、大きく息を吸う。数秒の間を置いて、それを一気に吐き出しながら、だんだん、ゆつくりと、二の腕から指先にかけて全ての筋肉に力を込めていく。

……どうだ？

「……………うおっ」

俺の想定は、いい意味で裏切られた。

突如。

俺の両腕を、まるで内側から爆裂したかのような衝撃が襲ったのだ。不思議と痛みは感じなかったが、驚いて目をやると、前腕部の筋肉が明らかにふた回り以上膨張している。

しかし、そんなことより俄然目を引く大きな変化があつた。

皮膚が張り詰め、表皮に浮き出た血管の色が鮮明に見える、俺の前腕は。

俺の地毛よりも深い『黒』の体毛に覆われていた。

「……………き……………」

気持ち悪っ！

俺の前腕気持ち悪っ！

なんだこれ、すね毛が濃くなるとかそんな次元の話じゃない。植毛だよ植毛。

いや、それもあるけど。

明らかに二の腕よりも太くなっているせいで、これでは遠目に見たときのアンバランス感は否めないだろう。

試しにもう一度両腕を体の横につけてみたが、やはり予想通り。元の腕の時は太腿の

あたりにあった手が、今や膝にまで届きそうな位置にある。

くそつ。

うまくいったらセルフもふもふが半永久的に楽しめるかも、とか甘い幻想を抱いていたのに。

……でもよく考えれば、出逢い頭の薊も、今の俺と同じようなことで腕だけを獣化させていたから、成功といえれば成功なのか。

まあ、仕方ない。

そんなもんだろ、人生なんて。

この魔法の言葉で、俺はあらゆる不条理を乗り越えてきた。皆もどうしようもない逆境に挫けそうな時に眩こう。俺と一緒に諦めようぜ！

俺は再び木の方に向き直り、獣とかした両腕で、見よう見まねのボクサーっぽい構えを取ってみた。

そう、男と同じ。

重要なのは体毛見た目ではない、威力中身だ。

実体験を元に語るなら、満身創痍の薊が放ったパンチですら、人間一人を粉々にする威力を誇っていたのだから、『人狼』の身体能力というものは底が知れない。

果たして、ペーパーのド新人『人狼』であるところの俺が、どれほどの力を引き出せ

るのか。

暫く木の前に立ち尽くして、じつと睨み合う。

……よし、行くか。

俺は腰を捻って、思い切り全身を引き絞り。

手首から先を投げつけるように、右拳を振り抜いた。

それは漫画の中でしか見た事のないような、巫山戯た光景だった。
衝撃。

一瞬遅れて、轟音。

俺が殴った木は、根元からへし折れて。

ぶっ飛び。

鉄棒にぶつかり。

ジャングルジムにぶつかり。

滑り台にぶつかり。

決して広くはない公園の中を、ピンポン球のように跳ね回った。

何度も鉄製遊具に激突する度、だんだんと崩れていく木が、一向にその勢いを弱める
ことはなく。

巡り巡って、ついに俺と感動の再会を果たす。

危ない危ない危ないって！

「ちよっ……っ……っ！」

俺は反射的に、正面から飛来する木に対して右手を突き出して目をつむり、一瞬の後

に訪れるであろう衝撃に備えた。

しかし。

俺のそんな姿を笑うように。

既にボロボロだった木は、俺のほんの少し手前、目と鼻の先の空中でバラバラに崩壊。無数のおが屑と化したそれは、俺の体を避けるようにして、左右に分かれ吹き抜けていった。

「……」

……やばい。

これはヤバイな。危うく怪我するところだった。

今の俺が、どれだけ生物として規格外かが分かった。

だが、この力はきっちり制御して、必要に応じた加減ができるようにならなければ。いつか俺自身が危険な目にあうかもしれない。

どっと疲れが出た俺はその場に座り込んで——へたり込むとも言う——、一息ついた。

今までの認識が甘かったのかもしれない。

獣の黒腕のまま、ついついもの癖で後頭部をぼりぼりと搔く。

……ん？

え、なにコレ。

指先に、今までにない違和感を感じた。最初は寝癖か何かかと思っただが、そうではない。

耳だ。

薊の頭頂部から生えていたアレが、俺にもある。つーかいつの間に……。腕に気を取られて気付かなかったのか。

フサフサだ……。ちよつと気持ちいい。

でも果たして誰得なのだろうか。どうせ獣耳を生やすなら、もつと美少女高校生とか巫女さんとかあるだろ。眼の腐った男子高校生なんかに生えてしまつては、謎の化学変化が生じてしまつて。それは最早ただの哀しい生き物なんじゃないか。

放心状態で暫く耳を弄り回していた俺だったが、今度は腰回りにも何かの感触を得た。

……まあそうですよね。

耳が生えているなら、そら尻尾も生えるわ。

俺の視界の端で、ゆらゆらと揺れ動く黒い尻尾。長さは、一メートルちよつとといったところ。耳と同じく、毛並みはフサフサ。触れている自分の掌の感触があることから、神経が通っているのも分かる。

これで俺も、晴れて『人狼』の仲間入りか。

「……人間だった頃の感覚のままでは、まずいかもな」
さしあたっては。

薊の『依頼』の件を抜きにしても、目下の目的は『馴れる』事だと。
俺は、一層キツく気を引き締めた。

それから数十分の時間をかけて。

取り敢えず四肢の獣化は一通り試してみた。

やはり、そのどれもが右腕の時の例外に漏れず、驚異的な威力を内包していた。

……道のりはまだまだ遠い。

サイクロンでも通り過ぎたかのように荒れ果てた公園の中で、俺は辛うじて原形をとどめていたブランコに座った。

ギイ、ギイ、と。

錆びたブランコは、俺の体を規則正しい感覚で揺すっている。

……そろそろあいつのところに戻るかな。

しかし、腰を上げようと体に力を込めた時。

ふと、素朴な疑問が頭を過ぎった。

もし俺が、これから『カテゴリーキラー』を倒しに行くとして。

覚悟を決めて、倒しに行くとして。

奴が今どこにいるかを正確に把握する必要性が、やはり出てくるのではないか。

と言うか、断片的な情報を繋ぎ合わせて推測するに、奴が現在千葉市内にいるかどうかも怪しい。奴は『同業者』たちと合流し、『ある吸血鬼』を倒すために、『直江津』へ向かったという。

現在、時刻は午前零時半。俺が地下の結界に迷い込んだのが午後七時だったはずだから、つまりは単純計算で、俺が奴と遭遇してから既に五時間以上が経過していることになる。

……本当にあのまま徒歩で移動していたとしたら、今はどの辺りにいるんだろう。

「でもまあ、よく分からん術とか使える『専門家』だってことを考えるなら、もう目的地に着いててもおかしくないか……」

しかし俺の中には、拭い去れないふたつの違和感があった。

まず。

『カテゴリーキラー』が、わざわざ吸血鬼に使うはずだった大規模結界を、こんなところで使い捨てていること。

そして。

果たして『カテゴリーキラー』という男は、手負いの獲物を放っておくような、ハングリー精神にかける奴なのか、ということ。

突然だが。

今の俺には、人間を遥かに凌駕する感覚機能がある。

視覚が。

聴覚が。

嗅覚が。

今まで生きてきた世界とは、まるで別物のような情報を俺に伝えてくるのだ。

つまり、何が言いたいのかというと。

俺が今腰を落ち着けているこの公園を中心とした、半径何キロかで起こる物音は全て把握できているし。

そもそも、風上から漂ってくる『匂い』が分かる。

俺は、先ほど試運転を終えたばかりの『脚の獣化』を行い、全力の二十パーセントくらい力の加減でブランコから飛び退いた。

一瞬の間を置いて。

俺が座っていたブランコの直上から。

巨大な銀の十字架が降下した。

爆音が、空虚な街にこだまする。

圧倒的質量で上空から飛来した金属オブジェクトは、ブランコの骨組みをいとも簡単にひしやげて、地面に激突した。

煙幕のような土煙が、俺の視界を遮るようにもうもうと立ち込める。

やがてその向こうから現れたのは、件の『怪異ハンター』の姿だった。
よれよれのロングコート。

目深のハット。

長髪を後ろで束ねた、彫りの深い顔立ち。

口元は、いつかと同じように優しげな笑みを浮かべている。
間違いない。

『カテゴリーキラー』だ。

「なるほど、野生の勘というやつか。小賢しい限りだ」

『カテゴリーキラー』の顔から、小気味の悪かった微笑が一瞬消えて、侮蔑と苛立ちに満ちた視線が俺に突き刺さった。

今まで感じたことのない、明確すぎる殺意の眼差しに、思わず体が竦む。

なるほど、今のが本音なのね。

「久しいな少年。数時間ぶりか」

気がつくくと元の薄ら寒い笑みに戻っていた奴の顔が、まるで旧知の仲かのような親しみを込めて、そんな言葉を投げかけてくる。

「私が去った後に何があったかは、大体察したよ。あんな野蛮な女に魅入られて、君も大変だったようだね」

「ああ、おかげさまでな」

やはりそうだった。

奴はすでに当初の予定を変更し、『煩わしかった追手にトドメを刺す』事にしたのだ。薊を巻く為に使ったはずの結果が未だ効力を失わないのは、意図してやっていたことだった。

つーか、どのツラ下げて俺の前に現れたんだ。

どんな感覚してるんだ、コイツ。

こちららお前のせいで、比喩でもなんでもなく一度死んでるんだぞ。

自分でも知らぬ間に、俺は握りしめた拳を小さく震わせていた。

それが、緊張のせいなのか、抑えきれない怒りのせいなのか。そんなことは今どうでもよかつた。

「あんた、罪の無い一般人を巻き添えにして殺して、それでも何も感じないのか」

明らかな敵意を込めた眼差しで、『カテゴリーキラー』を睨みつける。

彼我の距離は、現在五、六メートル。

相手が普通の人間ならともかく、おそらく互いに十分『仕掛けられる』間合いだ。

「あんたは何も感じないで、今、俺を二度殺そうとしてるのか」

『カテゴリーキラー』は、俺の問いを受けて、暫く黙り込む。

やがて何かに合点がいったかのような領きと共に顔を俯かせ、再び顔を上げる頃は、そこに悲壮な面持ちを『作っていた』。

「何も感じていないわけがないだろう。今だって後悔しているよ、すまなかつた、少年」

どこまでも軽薄。

どこまでも残酷。

コイツは、『そういう』男なのだ。

『こうやって』、今まで生きてきたのだと。

俺はようやく腹を括った。

感謝しなければいけないのかもしれない。

何故なら。

俺が今抱いている『殺意』が、自発的に思慮を重ねた結果生まれたものではなく、当の本人によって『とどめの後押し』を受けたことで生まれたものであるなら。

ほんの少しだけ、気が楽になるからだ。

「笑えるな。これから嘘をつく時は手鏡でも持ち歩くこつた」

「……ほう、よく分かったね」

『カテゴリーキラー』は一瞬目を丸くして、今度はやんわりとした関心の表情を『作った』が、すぐにまた元の微笑を浮かべた。

心底気持ちが悪い。

俺の目つきだって、ここまで他人を不快にさせることはないだろう。

……そうだと信じたい。

「兎にも角にも、君は現在、私にとって倒すべき『怪異』なわけだが。残念ながら私は、今まで一匹だって『怪異』の命乞いに耳を貸したことは無いんだ」

『カテゴリーキラー』が、袖から覗く左の指で、パチンと音を弾く。

すると、奴の後方で地面に突き立ったままだった銀の十字架が独りでに動き出し。

綺麗な円を描いて回転しながら、空を裂く勢いで飛来。そのまま、黒のグローブに覆われた奴の右手に収まった。

「どうせ、あの女から代行でも頼まれたんだろう？」

私を殺すつもりだったわけだ」

収まったといつても、太さだけで本人の胴回りほどある、巨大な十字架だ。そのまま押し潰されてもおかしくないほどの重量があるはずなのに、『カテゴリーキラー』はいとも簡単にそれを振り上げ、肩に担いで見せた。

「びっくりしたかい？」

これは元々、近く合流するはずだった『同業者』のある男に、

スペアとして提供してやるつもりだったものだよ。これなら不死身の『怪異』と違って十分に闘える。ましてや『産まれたて』の少年相手なら、問題にすらならないだろう」

銀製のしたのは、私の勝手なアレンジだけだね。

依然、微笑みを崩さずに、なんでもない調子でそんなことを言う。

「先に言っておく」

『カテゴリーキラー』が、十字架を投擲するかののような構えを取り。

「大人は、汚いものなんだよ。少年」

それに対して俺は。

「……汚くない人間なんかこの世にいねえよ」

身を低く構え、この場を『全力で離脱するため』跳躍の準備に入った。確かに、奴のことは憎い。

直ぐにでも飛びかかってタコ殴りにしてやりたいところだが、それでは結果が見えて
いる。

できることなら、正面衝突は避けるべきだ。

「なんてこと、考えてるだろう?」

……全く。

最近流行なの? 読心術。

「簡単には逃がさないよ。君にはついでにあの女の居場所を吐いてもらわないといけないんだ」

「……物騒な話だな」

内心ギョツとしているが。

ついでに言うと思いい切り顔に出てしまっていたが。

そんなことは関係ない。

今は逃げるからこそが、最も生存率の高い選択肢なのだから。

覚悟を決めろ。

俺は、俺にやれることを全力でやるだけだ。

ゆつくりと、心の中で三つ数える。

「最後に、あんたに聞きたいんだが」

「おや、何かね」

三……。

「あんたはいつたい、彼女に何をしたんだ」

二……。

「……そうか。あの女、君にはそのことを何も言っていないのか」

「……答えろよ」

一……。

「別に。本当にくだらないことさ。それこそ君に話したら、きっと私と同じことを言うと思うよ」

「……そうか」

……ゼロ。

そこからの駆け引きは一瞬だった。

俺が膝を折り曲げ、跳躍の為の力を貯めるモーションに入り。

『カテゴリーキラー』は俺に、十字架を投げ込んだ。

鋭敏な感覚が、全てをスローに見せる。

足元に舞う土埃。

弧を描いて飛来する銀の十字架。

ハットの下から覗く、不敵な笑み。

そして。

俺を十字架から庇うような位置に、突如割り込んで来た女の影。

俺には、全てが止まって見えた。

「元氣いいねえ、二人とも。」

何かいいことでもあった？」

黒いニットワンピースの裾から覗いた長い脚が、飛来する金属塊を横から蹴りつける。

火花が飛び散り。

轟音が鳴り響く。

たったそれだけで、いとも簡単に軌道を逸らした十字架は、勢いそのままに公園のフェンスを突き破り、歩道のアスファルトに突き立った。

雪ノ下陽乃。

自称占い好きのお姉さんは、誰もが振り向くその美貌に怪しげな笑みを浮かべて。

凜然と姿を現した。

其ノ伍

白く霞んだ視界。

生ぬるい風が、砕けたアスファルトの粉塵を公園内に運んでいるからだ。

「はっはっはー」

緊張感の無い笑い声で、その女は俺の前に現れた。

厚い衣服の上でも分かる、女性らしく引き締まった身体と凹凸の激しいボディラインからは、先刻見せた怪力のことなど到底想像に及ばない。

雪ノ下陽乃。

只者ではないとは思っていたが、いよいよこの人も人間か怪しくなってきたぞ……。

「いやー間に合って良かった。言ってみたかったんだよねえ、今の台詞」

吹き抜ける夜風が、雪ノ下さんの艶やかな黒髪をなびかせる。後ろ姿からでは彼女の表情は伺えないが、きつといつかのように、不敵な笑みを浮かべているに違いなかった。

しかし、雪ノ下さんは何故ここが分かったのか。依然効力を発揮しているはずの結果にこうしてすんなりと入り込んできているし。

俺の鼻でも耳でも、接近を一切感じられなかった。

そう。

視覚で捉える分には、確かに彼女がそこにいるのが解る。

だが、『嗅覚』と『聴覚』で明確に認識することができないのだ。透明なフィルターがかかっているかのような。薄い霧に覆われているかのような。

ともかく、そんな得体の知れない力が、俺と彼女の間を阻むように横たわっている。

そんな感じがした。

「……」

内心、俺が今一番強く思っていることは、『助かったという安心感』ではなく。

『何故この人がここに存在するのか』だった。

さも当然かのように、俺たちに介入してきた彼女は。

何の為に。

何をしようとしているのか。

口ぶりからしたら、俺を助けに来たのかもしれない。

しかし。

何もかもが神の如き存在に仕組まれた喜劇であるかのようにはすら思えた俺は、頭について離れない薄ら寒さに耐え兼ねて、雪ノ下さんに声を掛けた。

「……雪ノ下さん」

「おやおや、これはまたお美しい乱入者だ」

喉を出かかった言葉を遮ったのは、意外にも『カテゴリーキラ』だった。

ばつちり被せて来やがって、なんか恥ずかしいだろうが。

「悪いんだが、用事があるなら少し待っていてくれ。こう見えて、私は今仕事なんだ」
おいおい。

こう見えて、つてなんだ。

いたいけの無い少年をドデカイ鈍器でミンチにする様が、一体それ以外のどんな状況に見えるって言うんだよ。怖いわ、いろんな意味で。

「……あの、雪ノ下さ」

「勿論、知っているよ。でも私今、あなたには用が無いんだよね」

俺が今度こそという思いで、雪乃下さんの名前を呼ぼうとしたその時、今度は当の雪ノ下さん本人に台詞を阻まれた。

……終いにやあ怒るでコラ。

しかし、次の瞬間。

内心不貞腐れていた俺の眼前で、怪訝な顔でこちらを睨む『カテゴリーキラ』に対し、雪ノ下さんか右手の指で音を打ち鳴らした。

乾いた音の振動が、夜の街に反響する。

「これからは、若い二人の時間ってことで」

数秒の沈黙を置いて、突如現れた竜巻の如き暴風が、俺と雪ノ下さんを飲み込んだ。

「なっ……なんだ、これ」

「……ちッ!?」

これも雪ノ下さんがやってるのか？

俺が驚愕の声を上げると、『カテゴリーキラー』が忌々しげに舌打ちをしたのは、ほぼ同時だった。

『カテゴリーキラー』が、公園傍の道路に突き刺さったままだった十字架に向かって素早く手をかざす。目測数トンの巨大な鈍器は、その重さを感じさせない軽やかな動きでアスファルトから引き抜かれ、目に見えない力で奴の元へ戻っていった。

「逃がすわけがないだろう……!」

力強く、されど静かな声色で吐かれた『カテゴリーキラー』の台詞。

主の元に還ろうと飛来した十字架は、勢いそのままに、『カテゴリーキラー』を中心にほぼ直角に軌道を変え、俺達に突っ込んできた。

……これは……。

「速いつ……!?」

駄目だ、間に合わない。

雪ノ下さんが何をしようとしているかは分からないが、このままでは『カテゴリーキラー』の攻撃が、この薄い空気の壁を容易に破るだろう。そう思った俺は、咄嗟に雪ノ下さんの前に飛び出して、なんとか直進する鉄塊の軌道を逸らそうと、拳を固めた。

『人狼』にとつて、銀がどれほどの悪影響を及ぼすのか、俺も詳しくはわからない。それでも、多少の肉体的損害なら恐れる必要がない今の俺なら……—。

しかし、その瞬間。

俺達を取り巻いていた暴風のカーテンが、一気に弾けた。

さらに、俺が決死の覚悟で放った渾身の右ストレートも虚しく空を切る。

「……はあ？」

間拔けな声を出す俺の視界には、閑散とした屋根の無い空間と、見上げる夜空が広がっていた。

そこには十字架も。

ひしゃげた遊具達も。

目深いハットの男もいない。

……ちよ、なにここ。

ついに俺の火事場の馬鹿力はテレポートすら可能にしてしまったのか。ジャツジメントですの！

「ここはね、君が出てきた地下鉄の入り口。その隣に建ってるビルの屋上だよ」

呆然としていた俺は、背後からかけられた声に振り向いた。そこには、後ろ手を組んで立つ雪ノ下さんが、花も綻ぶような笑顔でこつちを見ていた。……え、なに、普通に怖いんですけど。美人の笑顔ってどこか裏を感じさせるよね、童貞諸君は分かってくれるよね？

「……助けて、くれたんですか？」

「そうだよ、私が助けた。あのままじゃ君、確実に殺されてたしね」

ああ、そうだった。この人はさつきも、『カテゴリーキラー』の攻撃から俺を助けてくれているじゃあないか。

得体の知れない、謎の膂力で。

挙げ句の果てには、瞬間移動ときたもんだ。

いよいよ人間離れしているし。

……ますます信用からも遠ざかる。

「雪ノ下さん」

「なあに？」

あつけらかんと、小首を傾げて彼女は答える。俺は、胸につつかえる疑念の全てを、ドロドロに溶かして、一つにまとめた。

ようは、核心を突く一つの質問を投げかけた。

「貴方は、何者なんですか」

数秒の沈黙が流れた。

強張った表情で、ただ相手の大きな黒目を見つめる俺と、その視線を正面から受けたまま、微動だにしない雪ノ下陽乃。

屋上に、ふわりと風が吹き込む。

先に声を上げたのは、雪ノ下さんだった。

「君、面白いよね」

「……は？」

予想だにしていなかった返答に、俺は今日何度目かも分からない声を出した。

そんな俺を見て、雪ノ下さんはお腹を抱えケラケラと笑う。

「だってさ、普通こんな状況で、私のことを疑ったりする？ よつぼど疑心暗鬼なんだね」

「……」

「……」

「きつと、いろんな人に裏切られてきたんだろうな、比企谷くんは。可愛いよ、すごく」

どんな言葉を返していいか分からない俺は、ただじつと雪ノ下さんを見ていた。不思議と、『可愛い』なんて言われても、全く嬉しくはなかった。

「悪意に怯えて縮こまる。まるで捨てられた仔犬みたい」

ようやく笑いが収まった様子の雪ノ下さんは、大きく息を吸って、吐き出す。再び顔を上げる頃には、いつかと同じ強化外骨格の如き笑みが張り付いていた。

「安心して。私の正体も今から話すし、目的は本当に君を助ける、ってことだけだから」
取り敢えず落ち着こう、と言う雪ノ下さんは、閑散とした屋上の隅にポツンと置かれた一脚のベンチを指差した。

「言つたでしょ。私は君の味方だ、ってね」

雪ノ下さんは、自分が怪異に深く関わるようになった経歴を、詳らかに話してくれた。身内が、幼少から怪異に取り憑かれている特異体質であること。

大学に進学した時、何代か上のOBの中に、特別怪異に詳しいサークル仲間達がいたこと。

その身内をどうにかするため、彼らとコンタクトをとったこと。

先刻見せた怪力も瞬間移動も、ちよつとした未来予知さえも、彼等の指示の下身に付けた、小さな裏技だということ。

そして、俺を助けようとする理由。

それを聞くと、雪ノ下さんは待つてましたと言わんばかりに語り出した。

「いやー、それがね。先輩からさっき連絡があつて。『今直江津は手一杯だから、これ以上の面倒事は出来るだけ避けてほしい』なんて言われちゃつてさ」

相変わらず胡散臭い人だったなあ、と。月のない夜空を見上げて呟く雪ノ下さんは、悪戯好きの悪童のような笑みを浮かべていた。

……なんだかんで、彼女もその先輩を慕ってはいるのだろうか。

ぼーっと雪ノ下さんの横顔を盗み見ていた俺は、ふと鼻をつく血の匂いに気付いた。首を回して辺りを見るが、源たりえそうなのは何一つ見当たらない。閑散としたビルの上と、街灯だけがむなしく輝く景観が眼下に広がるだけだ。

……まだ、鋭敏過ぎる感覚に俺がついていけないのかも知れない。

「何か事情とか、知ってる？」

そう言った雪ノ下さんは、気が付けば肩が触れ合うほどの距離にまで詰め寄ってきて、俺の瞳を覗き込んでいた。ジャパニーズニンジャかなんかですか、その気配遮断スキルは。

俺は、思わず動揺してしまった男心を気取られまいと必死に平静を取り繕いながら答えた。

「そんなに深くは知りませんが……確か、何人かのヴァンパイアハンターが途中で、『カテゴリーキラー』もそこに合流するつもりだった、とか……」

「なーんだ、結構知ってるじゃない」

聞くや否や、雪ノ下さんは指で銃の形を作り俺に向き直ると、「ぼーん」なんて言いながらウインクをしてきた。

流石の執行官、雪ノ下陽乃。

危うく俺のハートがエリミネーターされるところだったぜ。今回はなんとかパラライザーで済んだけど。

やだ、俺の眼と色相濁り過ぎ……。

「そう、まさにそれだよ。あっちも結構面白……厄介なことになってるらしいんだよね」
いや、本音が口から出かかってますよ。

「まあつまり私の目的は、『カテゴリーキラー』をここで何とかして、直江津に向かわせないことにあるんだけど……——」

雪ノ下さんがそう言いかけて、突然黙った。俺はその瞬間の、彼女の苦しげに顰められた眉を見逃さなかった。

……なるほど。

さつきから匂っていた血は、これか。

「あちやあ。ちよつと当て方が悪かったかな」

雪ノ下さんの右脚、膝の直ぐ下辺りから、数滴の血が滴って、コンクリートの床に染みを作っていた。彼女の言う通り、きつと『カテゴリーキラー』の十字架を蹴り飛ばした際、衝撃を殺しきれなかったんだらう。黒いタイツが破れ、その下に赤黒い傷が深々と刻まれていた。

……流石にいたたまれない。

俺は思わず、その傷を直視できなくなるほどの自責の念を感じて、目を伏せた。

何故ならその傷は、本来死の運命を辿るはずだった俺を救うために、雪ノ下さんが肩代わりをするような形で負ったもの。

今、俺の前で流れているのは、十／十とは言わないが、俺にも責任の一端はあるはずの血なのだ。

「……すいません、俺のせいですね。どうかかしますんで、何処から適当にガーゼと消毒液でもかつぱらってきま」

俺が、良心の呵責に耐えかねて行動を起こそうとしたその時。

「この傷、『舐めて』。比企谷くん」

「すう……………」

俺の時が、止まった。

六秒、五秒、四秒、三、二、一……。

時は、再び動き出す。

「何言ってるんですか、雪ノ下さん」

「すごい、本当に時が止まったみたいだったよ。まさか瞼一つ動かさないなんて」

いや、そうじゃなくてすね。

「何故俺が雪ノ下さんのおみ足を舐めなければいけないのか、説明がいただけないとで

すね……」

しどろもどろになって言う俺に、雪ノ下さんは悪戯な笑みを浮かべていた。

計画通り、つてか。タチが悪い。

「あんまりからかわないでください。思わせぶりな態度を見せられたら、簡単に好きになっちゃいますんで」

「うわ、それはちよつと気持ち悪いかなー」

本当になんなんだこの人は……。今のめつちや傷付いたんですけど。

いとも簡単に俺の純情を踏みにした雪ノ下さんは、自分の人差し指をびつと立て、薄い口紅の乗った艶やかな唇を指し示した。

『『人狼』の体液には、強力な治癒効果があるんだよ。ほら、何か心当たりはない？』

「……心当たり……？」

少し考えて、すぐに思い当たった。

薊の傷を止血する時、彼女は俺に血を『吸い出せ』と言ったのだ。きつとそれは、雪ノ下さんが言うような効能が、俺の唾液にあつたからなのだろう。

つまりあれは、銀髪ケモミミ美女と俺とのエッチなフラグでは無く、その実とても合理的な処置だったのか……やっぱ現実って糞だわ。

たまには俺が良い目を見てもいいじゃないの。

「……ま、いいか。分かりました」

思わず溜息をついて、俺はベンチから立ち上がり、雪ノ下さんの足元に膝を折った。低くなった目線の正面には、太腿半ばまでのワンピースの裾、雪ノ下さんの聖域を護る暗闇があつた。パンツ見ながら足を舐めるとかどんなご褒美だよ。

なんだかんだでラッキーすけべの神はまだ俺を見放してはいなかったか！

くそつ、あと少し……あと少し見ていたら目が闇に慣れて……！

横目でチラチラと覗きを試みていた俺だったが、『人狼』の鋭敏な感覚が、雪ノ下さんの冷たい視線に気付いた。

……終わった……

「比企谷くんは、人間に戻りたいとか思わないの？」

「すいませんこれは男の性というか………はい？」

あ、そつちじゃないのね。良かったー。

いつになく真剣な声色の雪ノ下さんに、俺も思わず身構えた。

それは俺自身、正直まだよく分かっていないことだ。

確かに俺は今、人間ではない。

全く別の生物に推移しているし。

全く別の次元へ乖離してしまっている。

だけど。

「特別、人間に戻りたいとかは思っていないよ」

俺自身、今の俺がどんな表情でこの返答をしたのか分からなかったが、雪ノ下さんが珍しく面喰らったように眉を吊り上げていたから、それはきつと余程酷い顔だったのだろう。

「……そんな『さもありなん』、みたいな感じで割り切れちゃうか」

「だって、別に俺が人間じゃなくなったとして、迷惑かけるのは多分家族くらいなもんですから。それに、見た目が完全な化物になつていけるわけでもないから、上手いことやつていけば社会にも溶け込めるでしょうし」

「まあ、そりゃあそうかもね」

「確かに最初は動揺しました。だけどよくよく考えりゃ、今の俺はどんな才能人をも種族という垣根から超越してゐるって事です。勉強が出来るとか、顔が整つてゐるとか、そんなことは人間社会の内側でだけしか通用しない優位性であつて、いざ生物として本来の価値つてのは腕っ節の強さに帰結しますからね」

そう。

俺だつて何も、この世の全てを否定的に取つて生きて行こうなんて思つていない。そもそも俺が人を信じなくなつた理由だつて、誰かのなんでもないような行為を、勝手に

『好意的』に解釈してしまったことが原因だ。

俺はありのままの現象を、自分の都合に合わせてせつせこ歪めて生きてきた。

でも、それはきつと失敗だった。

他人から傷付けられることを恐れすぎて、結果として最も深い傷を、自ら刻んでしまったから。

そんなのは、リストカットが趣味なんて輩と大差ない。

俺は、恥を知るべき痴れ者だったのだ。

「つまり俺が言いたいことは、『力こそパワー』ってことです」

俺はありつただけの気合で、俺のできる全力のキメ顔を作った。

どうだお前達、たまには俺も良いこと言うだろ。

雪ノ下さんはそんな俺を見て、小さく笑ってから空を見上げた。

「……やっぱり君って」

どんな顔をしているのか、膝立ちのままの俺からは見えない。だけどやっぱり、彼女はきつと笑っているんだろうと、そんな漠然としたことを思った。

「面白いね」

その後。

ビルの側面に取り付けられていた昇降階段を使い、俺達は普通に地上に降りて、地下鉄へと向かった。

雪ノ下さんのおみ足の件について、深く言及はしまい。ただ一つ言えるのは、余りにも『人狼』の回復力が強すぎて、舌先が触れた瞬間にほぼ完治してしまったため、存分に感触を味わうことができなかつたということだ。

……つてそれ殆ど全部言うとながな。

ホンマ堪忍してやしかし。

ともかく、数時間前と同じ地下道を通って、数時間前と同じ血痕を辿り。

俺達は、薊の居る用具室の前に到着したのだった。

「どーするの？　　なんて答えるかはもう決めてる？」

雪ノ下さんが、扉の前で硬直している俺の背中にそう問いかけた。

「……まあ、大体は」

「嘘、まだ煮え切らないんでしょ」

俺の嘘は速攻でバレた。彼女には他人の心情なんて筒抜けなんだった。相変わらず学習しないな、俺も。

そう、俺は未だに悩んでいた。

薊の願いを受け入れるか否か。それはもしかしたら、殺人の一端を担ってしまうかもしれない選択だ。

世界の裏側に生きる『怪異達』が、人間社会の法に囚われることはない。もし『カテゴリーキラー』がなんらかの決着の果てに死んだとして、それはきつと明るみには出ないし、仮に出たとしても、それはただの『怪事件』として世間に処理されるのだろう。故に俺は、社会的制裁を受ける可能性に怯えているのではなく。

単純な。

至極単純な。

俺自身という一個人の矜持と、今やあやふやな人倫観の上で揺れているだけに過ぎない。

かった。

「私がまた、なんとかしてあげよっか」

俯いたまま、じっと考えをまとめていた俺に、雪ノ下さんは再び声をかけてきた。

「私はどこかのお人好しな先輩みたいに、『助けたんじやない。勝手に君が助かっただけ』だなんて言わないよ」

雪ノ下さんの声色は冷たいよう。

我が子に語り掛ける母のように暖かく。

また、赤の他人と会話するかのようは無機質だった。

きつと俺は今、彼女に試されている。

「私が『助けてあげるから、君はもう何もしなくていいよ』」

違う。

「そういうわけにはいきません」

間髪入れずに、そう言い放った。

人生には、必ず避けては通れない選択を迫られる機会が何度かあると、人々は言う。ならば俺にとってその機会とは、きつと今だ。

二十年にも満たない俺の人生に、果たしてどれほどの価値があるかは分からない。

尊くはないかもしれない。

特別でもないかもしれない。

だが、かけがえのないものであったことは確かだ。

誰かが俺のような生き方を選べはしても、誰かが俺自身になることはできないのだから。

俺が舵を取らなければ、それは俺の人生ではないのだ。

「――斃します」

体を翻し、雪ノ下さんに向き直る。

逡巡を振り払って、ようやく俺は腹を据えた。言葉の力とはやはり凄まじいもので、それを口にした時、すでに俺の中には確固たる意志が立ち上がっていた。

本当は殺さなくてもいいのかも知れない。

だけど、今決めた。

俺が決定した、俺の選択だ。

必ず『奴』に、報いを受けさせてやる。

誓いのように、祈りのようでもあった俺の言葉に、雪ノ下さんは人の悪い笑顔を浮かべた。

「……やっぱり比企谷くんといると退屈しないなあ。私気に入っちゃった」

雪ノ下さんは大きく一歩こちらに踏み込み、息も触れ合う距離で、じっと俺の瞳を覗

き混んできた。

大きな黒眼に映り込む俺の姿が、はつきりと見える。

不思議と、突然の急接近にも関わらず、俺は動揺していなかった。

「なんでもそつなくこなすヤツなんて、つまらないでしょう。人間は苦惱して、跪いて、汚れて、憐れに地面を這いずって。そうしてきつと、初めて完成するんだよ」

ふわりと、雪ノ下さんの髪の毛の香りが漂ってきた。良い匂いだ。でも、それが何の香りかは分からない。どこかで嗅いだことがある気もするし、全く嗅いだことがないものな気もする。

まさに、彼女らしいと評するべき匂いだった。

「それで、具体的にはどうするつもり？」

その言葉に、俺は一気に現実へ引き戻された。

……。

……。

……。

それもそうだな。

やっべ、どうしよう。目先の問題に精一杯で、事態を俯瞰的に見ることを忘れていたようだ。

これから『カテゴリーキラー』を斃すにしたって、どうするんだ。なにを、どうして、どうやったら、俺は目的を達成できる。

「……あー……」

「……」

「……いや、まあ。それはアレですよ、アレをこーしたり、コレをあーしたりして……」
沈黙が痛いとはまさにこのことか。俺はしどろもどろになりながら、何かを語るように何も語っていない台詞を吐いた。

「結局ノープランね。ま、いいけど」

呆れたように、雪ノ下さんが息をついた。

さっきまでちよつとカッコつけていた分、現状との落差のせいでより恥ずかしい……。

「……なんとか考えてみます」

俺は、雪ノ下さんを見ているようで、わずかに視線を脇にそらしてそう言った。

「いや、別に構わないよ。さっきは私も少し意地悪なこと言ったし」

ぱちん、と乾いた音が鳴る。雪ノ下さんが指を打った音だ。

その音は俺の視線を雪ノ下さんの元に集め、場の空気を再び引き締めた。

「言ったでしょ。私の目的は『カテゴリーキラー』を直江津に向かわせないこと。で、君

の目的は『カテゴリーキラー』を倒す事。つまり私達が協力したら、互いに大きな利点が生まれるじゃない」

「……確かに、そうですね」

なんだ。

『俺の味方』だなんて言っていたが、雪ノ下さんは最初から、きつとこうなることを見越していたに違いない。俺が彼女の目的達成に都合のいい動きをしてくれると知っていたからこそ、今迄何度も助け舟を出してくれたのだ。……女つて怖いよお。

「よし！　じゃあ共同戦線を張るのは決定として、次は役割分担なんだけど——
……」

しかしまあ、雪ノ下さんが協力的な姿勢を取ってくれると言うのなら、それは願ってもいない話だ。きつと彼女が持つ多様なスキルは、これから先どんな状況になったとしても必ず役に立つ。

なんなら、一切手こずることもなく『カテゴリーキラー』を倒すことだって……——

「『カテゴリーキラー』は、比企谷くんになんとかしてもらおうね」

「いや、全然意味分らないです」

何がどうなったらそういう分担になるんだよ。雪ノ下さんは、俺がついさつき、奴に挽肉にされかけたことを覚えていないのか。

「いや、マジで意味分からないですって。俺はてつきり、雪ノ下さんと俺のコンビで『カテゴリーキラー』を斃す流れだと、あわよくば殆ど雪ノ下さんに任せられるとも思ってたんですけど……」

「後半のやつは口に出したらダメだったんじゃない？」

おつといけない。

テンパって思わず余計なことも口走ってしまった。

「まあまあ。君が慌てる気持ちもよく分かる。勿論お姉さんは、何も考えないでこんなこと言ってるんじゃないよ」

「……何を考えているんですか」

「そう慌てないの。男は常に余裕を持たなきゃ」

雪ノ下さんは、ふっふっふー、とわざとらしい笑い声で、ぴんと人差し指を立てた右手を俺に向けた。

「我に秘策あり……なんつって」

其ノ陸

錆びた鉄扉を押し開いて、俺と雪ノ下さんは用具室に入った。奥行き五メートルも無い窮屈な空間には、銀髪の人狼が、俺が部屋を出た時と全く同じ体勢のまま、ぐつたりと力なく横たわっていた。

付けたままだった部屋の蛍光灯の光が、チカチカと点滅している。

「……遅かったな」

怪異の王。

人狼の姫。

薊は、血も凍るほど美しいその相貌に明らかな不満の意を浮かべて、じつと俺の眼を見つめてくる。

「悪い。待たせた」

「全くだな。この我輩を退屈で埃臭い場所に何時間も放置するとは、無礼にもほどがある」

そう睨まないでくれよ。

俺は薊に歩み寄ってから、冷たいコンクリートの床にどかっと座り込んだ。至近距離

から見る薊の顔色は、傷口の処置を施す前より幾分か血色も良く、床の血溜まりもいつの間にか乾ききっている。

「どうやら、今はさほど辛くもないらしい。」

「……なあ、お前のあの話なんだが……」

「その前に膝枕だ、この阿呆め。我輩は肩が凝った、もうこれ以上この姿勢でいるのは適わん」

「……阿呆って何だオイ。こちとら一大決心で話を切り出したつてのに。」

しかし薊の体は、硬いコンクリートの上で何時間も同じ体勢で横に倒していたことを考えると、確かにそれなりの負担を感じていたとしてもおかしくないかも知れない。

一瞬、聞こえなかったことにしてそのまま話を続けてしまおうかとも考えたが、そんなことでは後々どんなしつぺ返しが来るかも分からない。

しばらく考え込んでみると、薊の尻尾が、不景気な表情とは裏腹に、ぱたぱたと大きく振られていることに気付いた。俺の膝枕はそんなに魅力的か。

こうなったら今度、俺も俺の膝を枕にして寝てみるしかあるまい。そのためにはまず、凝り固まった身体を柔らかくしなければ。……ヨガでも始めようかしら。

「分かったよ。何百年も年上のくせに、我儘なヤツ」

「ふふん、良きに計らえ」

俺の言葉に薊がやんわりと破顔して、首の筋肉だけで少し頭を浮かせた。このスペースに脚を差し込め、ということだろうか。

正直、俺の膝枕処女（小町を除く）は既にコイツに捧げてしまっているのだから、正直なところ今更さしたる抵抗感も無い。俺は、向かい合ったままの体勢で、膝を折り畳んで胡座をかいてから、薊の頭の下にすつとそれを滑り込ませた。

……薊の視線が俺の体側に向いているからか、一回目の時よりも距離が縮まっている気がする。

「これで満足か？」

「是非もない。……どれ、このまま一眠りするかな」

「寝るな、お前には話があるんだっつもの」

俺は普段から飼い猫と触れ合う時の癖で、薊の艶やかな毛並みの獣耳を、思わずこしょこしょと撫で回してしまった。

一瞬の間を置いて、自分がやらかしてしまったことに気付いたが、当の薊は反発するどころか、甘い声を出しながら頭を俺の太腿に一層強く擦り付けてくるものだから、ちよつと反応に困る。

「なんか付き合いたてのバカップルみたいだよ、二人とも」

……。

そうだ、すっかり忘れていた。今この場には、俺と薊は以外にも人がいるんだ。これは中々に痛いところを見られたぞ……。

俺は首を捻って、開け放たれた部屋の入り口に身を預けて立っていた雪ノ下さんの方に目を向けた。

「勘弁して下さい雪ノ下さん。もっと自分の存在を主張しといてくれないと……」

「あれ？　今の私が悪かった？」

雪ノ下さんの瞳孔から光が消えた。ほんの軽いジョークのつもりだったんだが、どうやら彼女は本当に俺が舐めた態度をとったと思ったのだろう。

怖い怖い怖い。

マジで謝るからその顔やめて下さい。夢に出るわ。

「……そう言えば、主は何者だ。見たところただの人間ではないな」

産まれたての子鹿並みに震えている俺を他所に、薊はそんな言葉を雪ノ下さんに投げ掛けた。しかし、その視線が当の雪ノ下さんへ向くことはなく、(そもそも、俺の体が邪魔で薊からは雪ノ下さんの姿が見えていないと思われる) 膝枕の感触を味わうためか、ごろごろと体の向きを変えては、俺のパーカーの裾に鼻を寄せたりしている。

興味が無いなら聞くなよ……雪ノ下さん相手によくやるぜ。

「お初にお目にかかるわ、四狼正宗。私は比企谷くんの協力者、つまりは回り回って貴方

の協力者。名前は……教えたところで、どうせ覚えないでしょ？」

対する雪ノ下さんの対応は、俺が思っていたよりも遥かに落ち着いていて、当たり障りが無かった。これだけ舐めた態度を取られたら、笑顔全開でガトリング銃の如く薊を罵ったりしそうなものだが。いや、気のせいかもしれないが、雪ノ下さんの眉が僅かに痙攣しているようにも見える。あれは内心相当腹が立っていると見えるが、それを表に出さない理由もあるのだろうか。

つーかこの人、薊の名前を以前から知っていたのか。それは果たして、雪ノ下さんの情報量がすごいのか、それとも薊の知名度がすごいのか。……業界の闇は深いぜ。

返答を受けた薊は、「左様か」とだけ告げると、再び俺の太腿の上でもぞもぞと悶え始めた。

「おい、さつきから人の衣類を弄るな、匂いを嗅ぐな、気持ち悪い……」

よく見ると薊は、俺のパーカーやその下のシャツをすんすんと匂っては、そこに顔をうずめたり軽く口に含んだりしていた。

獣の本能が、付着している血の匂いに当てられたのだろうか。目のとろけ具合なんて、まさしく変質者のそれだ。

「む、すまん。気が付いたら夢中になっていた」

我に返った様子の子の薊は、はっとした表情でそんなことを言っているが、両手共に俺

のパーカーを掴んだままだった。

「どうやら、口では言いつつもやめる気は無いらしい。」

助けを求めるつもりで雪ノ下さんの方を見た俺は、そこで彼女から凍てつく吹雪のよ
うな視線を受けていることに気づいた。

ホ、ン、ダ、イ、二、ハ、イ、レ、と口の動きだけで促してくる。

超怖い。

多分薊の態度のこともあって、通常の五割増しで苛ついていらつしやる。いや、そんなことが言えるほど普段の彼女を知らないけど。

……命があるうちに命令に従おう。

「お前の依頼、請け負った。俺は一人で奴を斃す。だからお前は、何もしなくていい」

「……………なんだと?」

「どうせやるからには、中途半端な仕事はしないってことだよ」

薊からすれば、俺の言葉はまさに寝耳に水な話だったのだろう。きっと彼女は、なんだかんだで俺が、人殺しを拒むと思っていたに違いない。

膝下からこちらを見上げる薊の顔は、やはり驚愕に目を丸くしていて。

口には破れたパーカーの断片を含んでいた。

「って何やってんだ!?」

「むぐう!!?」

俺は慌てて薊の口に指を突っ込んで、べつとりと唾液に濡れたパーカーの裾(だった布切れ)を引きずり出した。

「おまつ……人が大事な話してると時に……」

「いや、すまんすまん。怪我で弱っているせいとか、つい日頃の癖が出てしまつてな」

犬つて気がつくとも色んなものを噛み切るだろう、と。薊はけろつと笑いながら、なんでもないようにそんなことを言う。

「お前の謝罪からは全く誠意を感じないんだよ……!」

これ、結構な値段するやつなんだぞ。大抵のいい服は小町に当たる比企谷家で、奇跡的に俺が手に入れた珠玉の一品だったというのに、それをこの駄犬は……!」

「比企谷くーん?」

俺が本腰を入れた説教に入ろうとしたその時、例の肌を刺すような視線と、どこまでも底冷えする声俺に届いた。

脊髄反射で声の方へ振り向くと、案の定雪ノ下さんが、床に座る俺と同じ目線の高さまでしゃがんで、にこにこ朗らかに笑いながら俺を見つめていた。

パ、ア、カ、ア、ナ、ン、ゾ、ド、ウ、デ、モ、イ、イ、と声を発することなく口を動かしている。

ああ、これはもうダメだ。

流石におふぎけが過ぎた。

俺は即座に表情を平常運転に戻し、背筋をぴんと張った。

「真面目に話を聞いてくれ、薊」

俺の命の為にも……。

「聞いているよ。お前の意思も、言わずとも伝わった」

いつの間にか、薊の表情からも砕けた雰囲気が消え去って、どこか穏やかな微笑みがそこにあつた。俺の真つ向からの眼差しを、彼女もまた真摯に受け止めていたのだ。

「そうか、やる気になってくれたのか……」

「……今回限りだ。それに、お前の為に動くんじゃあない。あくまで俺が私怨で動くだけで、そこにお前は関係ないんだからな」

「……捻くれ者め」

「大きなお世話だ」

そう、今はこれでいい。

仮にこれから、俺にどんな選択肢とそれに付随する結末がやってきたとしても。

彼女を。

薊を舞台上に上げることだけは、あつてはならない。

だから今、俺が彼女に出来ることは、言葉をかけることだけ。それでいい。

それだけのことでいいのだ。

「やり遂げる自信はあるのか？」

薊の真つ直ぐな瞳が、俺のやつれた眼を焼き焦がす。その内側に潜む何かを見通されているような気がした俺は、明後日の方向に目を逸らした。

「自信がなかったら、最初からこんなこと言わねーよ」

薊は、なおも俺をじつと見つめ続けていた。

やがて、何かを悟ったかのように小さく微笑んで、瞼を閉じる。

「……左様か」

部屋の蛍光灯が、ゆらゆらと力なく点滅した。

午前03:30。

夜明けが近い。

しかし、俺達はまだ知らなかった。

いや、あるいは雪ノ下さんだけが知っていたのかもしれない。

これから始まる惨劇が、ついで誰一人救いはしなかったこと。

俺と、人狼の姫は。

互いに消えない傷を背負って。

果てに広がる、血を零したような暁を望むことを。

午前03:50。

俺は千葉駅から徒歩数分の、付近で最も大きいスクランブル交差点のど真ん中に突っ立っていた。

ここもすっかり結界の圏内らしい。

辺りには音もなく、もつと言えば車両が一台も見当たらない。街灯も含めた全ての光源が機能していない為、出歩くことすら危険なほど濃密な闇が満ちていた。

しかしその点に関して、今の俺は異常なまでに夜目が利く。俺をぐるりと囲んでいる四つの車道は、手前から奥へ真っ直ぐと伸び続け、やがて地平線に吸い込まれていくま

オオオオオオ……

オオオオ……

オオ……

俺は全身の筋肉に力を込めて、ありったけの気迫で肺に圧縮した空気を、一気に夜空へと解放した。

全身の毛が逆立ち、ざわざわと神経が疼き出す。どうやら俺の獣としての面が、本能に耐えられず今にも暴れ出そうとしているらしい。

閑散とした街に、獣が放つ『遠吠え』はどこまでも、どこまでも響き渡り、方々で乱立するビル群に反射して無数の木霊となった。

それから、どれだけの時間が経過しただろうか。

数分、あるいは数十秒だったかも知れない。

薄れていく残響音と入れ替わるように、乾いた足音がどこからともなく聞こえてきた。

数時間前に全く同じ音を聴いたというのに、なんだか妙に懐かしい気がする。

しかしまあ、つくづくらしくないぜ。

知的でクールな男であるこの俺が（根暗なだけとも言おう）、こうして野蛮な体育会系の

如く（全国の体育会系に謝れ）けたたましい声を上げるなんてな。

「けど、撒き餌にしては上出来だったろ？」

向かって正面の道路。

俺の問いかけに答えたのは、縫れたコートを翻し、暗闇の中から浮かび上がった、一人の男のシルエットだった。

目深のハット。

黒の長髪。

俺より頭一つ分はデカイ、異国の男。

……得物はどこに置いてきたのか、両腕はコートのポケットに突っ込まれている。

「君が何を考えているのか、私には甚だ分からないよ……。せっかく逃げ果せたんだ、与えられた猶予は、最大限有効に使うべきだったと思うがね」

確かに。

俺だって逆の立場だったら、こいつと同じ質問を相手に投げかけただろう。

だが事実、カテゴリーキラーはここに現れた。作戦の第一段階は、確かに遂行されたのだ。

怪訝そうに眉を顰めていたカテゴリーキラーは、明らかに、俺の一見やけくそにも見える行動を訝しんでいる。

「別に……お前には関係無いだろ」

聞かれて素直に答えてやる義理はない。

俺達は今、敵同士としてここに相對しているのだから。

カテゴリーキラーは、小さく「……それもそうだね」と呟くと、ハットのつばを指で押し上げて、それまで影に覆われていた顔の上半分を明らかにした。

彫りの深い外人らしい鼻立ち、燦んだ碧眼。

軽薄な笑みを貼り付けた顔を見て、俺も思わず小さく舌打ちをした。

「相変わらず、気持ちの悪い目付きしやがって」

「……それに関しては、君に言われたくないな」

うるせえ馬鹿。

揚げ足取るな馬鹿。

俺の目付きはチャームポイントだっつもの。

内心毒づく俺を他所に、カテゴリーキラーが首をひねって辺りを見渡す。

俺の目には、奴が何を探しているのかすぐに分かった。

「……あの女性は、今どこだい？」

ほら、やっぱりな。雪ノ下さんを警戒してるのか。

懲りねえ奴だ。

だから、こつちに答える義理はないんだよ。

「んなこと言ったら、お前はあのでけえ十字架どこにやったんだよ」

俺は話をはぐらかそうと、敢えて話題を別のものにシフトした。

カテゴリーキラーも、言外に俺の拒絶の意を感じ取ったようで、やれやれと言わんばかりにため息をついて、平坦な声で小さく笑った。

「……確かに、私達が言葉を交わす意味は、既に存在しないのかも知れない」

「……ああ？」

「我々は敵同士、狩る者と狩られる者だ。猟師が獣を追い詰めるように、私が君に投げかけるべきは言葉ではなく——無慈悲の鉛玉だよ」

言うや否や。

カテゴリーキラーの両腕が、片口から消失した。

いや違う。あまりのスピードに、かすかな残像を残したまま消失したかのように見えたのだ。

俺は、その光景を見たことがあった。

中学生の時、なんやかんやあつて朝から仮病を使い学校を休んだ日（詳しく言及したくない）、暇を持て余して、テレビの電源を入れた昼下がりのこと。

西部劇のワンシーン。

一人のガンマンが見せた、『早撃ち』だ。

カテゴリーキラーはそのガンマンのように。

腕を動かし。

懐から左右一丁ずつ、銀色の回転式拳銃を取り出して。

弾を装填。

引き金を引く。

この数ある工程を、人狼の俺ですら微かにしか捉えられないほどの速度で行った。

「うおッ……!?」

研ぎ澄まされた動体視力が、時間の流れを遅延させたかのように感じさせる。

全てがスローになった世界で。

俺は咄嗟に、マト○ックスよろしく膝を折り上体を反らした。コンマ0.0001秒

前に俺の頭部があつた場所を、銀の銃弾が素通りする。

僅かに遅れて、重なり合った二つの発砲音が街に轟き、俺の全身から冷や汗が滲み出

た。

今更奴がどんな得物を使ったとしても、別段驚くことはないが、それでもあの早業は

予想外だ。

「もつとも、この弾丸は銀製だけどね！」

カテゴリーキラーが、両腕に拳銃を掲げたまま言う。
奴もスイツチを切り替えたのか、語調が心なしか強くなっている気がする。

「……来いよ」

俺は震える手足を無理矢理動かして、カテゴリーキラーの射程から逃れるために移動を始めた。恐らくだが、相手が飛び道具を使う時、早期決着を望むなら懐に飛び込むのがいいのだろう。だが今は状況が違う。突っ込むより距離を離れた方が、時間は稼げる。

ほほほほ、捕まえてごらんなさい？

——なんつって、ふざけている場合じゃあないか。

次の段階を踏もう。

今はとにかく、逃げの時間だ。

こうして、大した前触れもなく。

俺達の闘いは幕を開けたのであった。

午前03:43

「比企谷くん、素人がプロの格闘家に勝つ方法、分かる？」

「いよいよカテゴリーキラーとの決着に臨むため。」

俺と雪ノ下さんは、「仕方ないからもう一眠りする」と言った薊を置いて、地下鉄を後にした。外の空気は、間もなく夜明けともあつて、公園にいた時よりも明らかに冷え込んでいる。

行く先も知らせてもらえないまま、雪ノ下さんの後を付いて行つた俺は、彼女から飛んできた突然のクイズに少し動揺してしまった。

「あつ……と、そうですね。……武器を使うとか、どうですか」

質問の意図が微妙に分からない俺は、自分でもパツとしない答えを返した。

「うーん、いまいちな。正解はコレ」

そう言うと、雪ノ下さんは右手で人差し指を立てて、ふいと明後日の方向を指した。
え、何？

何かあるんですか？

俺は雪ノ下さんの指先を視線で追って、首を捻る。

その瞬間。

俺の目に飛び込んできたのは、何の変哲も無い錆びれた信号機。

そして、死角から放たれた雪ノ下さんの拳だった。

「おぶッッ?！」

それこそプロボクサーの如く、洗練されたフォームから放たれる無慈悲のストレートに横つ面を捉えられた俺は、与えられたベクトルのままに体ごと一、二メートルほど吹っ飛ばされた。

「正解は、『騙し討ち』でしたー」

……納得できねえ。

全然信憑性無いし。

かりにこれが雪ノ下さんの言いたいことだったとして、俺にここまでガチのパンチを打つ理由も分からねえ。

やばい死ぬほど痛い、奥歯欠けたんじやなかるうか。

「……まあ、納得は出来ませんが、理解はしました」

「あれ、結構反応軽いね。もしかして綺麗なお姉さんにこんなことされるの、好きだったり?」

「俺だつてキレル時はキレますけど?」

「地面にのされたままの状態で言われても、あんまり怖くないなあ」

殴った上にドM扱いとか、マジで許すまじこの女。

いつか然るべき報いを……いや、駄目だ!　こんなことを考えたらまた心を読まれる!

咄嗟の英断で思考を打ち切り、俺は体を起こしてから土汚れを軽く払った。

頬の傷は、既に完治している。

「つまり今のは、カテゴリーキラーをおびき出してから騙し討ちをかます、つてことではないんですね」

仏頂面の俺に対し、雪ノ下さんの反応は芳しくない。

「うーん。それもまた、いまいち違うんだよね」

俺達はゆつくりと歩を進めながら、作戦の概要を共有する為になおも会話を続けた。

まず、と雪ノ下さんが切り出す。

「四狼正宗が君には言っただろうけど、彼女が撃退された理由は、この空にあるのよ」
「はい。月が隠れているから、殆ど力が出せなかったとか言っていましたね」

「確かに、この『新月の結界』は、人狼に対して絶大なマイナス効果を与える。君はまだ成り立てで、そもそも自分のベストコンディションを知らないから、いまいちピンと来ないんだろうけど」

「……それも、薊から言われました」

「そ。つまり今の君も、本来の人狼としての実力を極端に制限されているの。『母』である四狼正宗と同じく、ね」

「……今の状態で、制限されてる……?」

それが本当なら、一体どれだけ恐ろしいことなんだろうか。公園で発揮したあの腕力にまだ上があるなんて、正直スケールが大きすぎて想像もつかない。

ましてや、薊が本来の力を取り戻した姿など……。

しかしようやく俺にも、話が見えてきた気がする。

「——全力の俺なら、カテゴリーキラーを倒せるんですね」

「モチのロンだよ。恐らく、相手にもならないだろうね」

「……分かりました、雪ノ下さんの言う『騙し討ち』の意味が」

なるほどな。

何のひねりも面白味も無いが、これは確かに『騙し討ち』だ。それならば、俺達の役割分担にも納得が行く。

俺の役目は雪ノ下さんでも出来るだろうが、雪ノ下さんの役目は、きつと雪ノ下さんにしかできない。

駅の乗り口から、どれだけ歩いただろうか。

やがて俺達は、大きなスクランブル交差点に辿り着いた。

……辿りにビルが乱立する駅前近くに、こんな場所があったとは。

生まれてこのかた千葉で育った俺だが、知らなかった。

「ここが、奴を呼び出すポイントですか」

「うん。ここなら視界が開けていて闘いやすいし、辺りに高い建物も多いから、私も『作業』がしやすいの」

雪ノ下さんは、付近でももつとも高いビルをふいと顎で示した。全面ガラス張り。普段は大企業の支社だとか、高級ホテルだとかに使われていたりするのだろうか。

「大丈夫！ 私に任せてよ」

いつかと同じように、雪ノ下さんがぐつと親指を立てて、自信満々で言う。

正直この人の笑顔には、基本的に嫌な予感しかしない。

……本当、成功を祈るばかりだ。

「……頼みましたよ」

小走りで、暗いビルのエントランスに向かう雪ノ下さんの背中に、俺は小さく呟いた。

午前03:54

銃声が鳴り止むことはなく。

弾丸は雨の如く射出され続ける。

追撃を振り切る為、カテゴリーキラーから背を向けた俺は、コンクリートの道路を全力で蹴った。

獣の膂力が俺の体を大きく宙に投げ出し、そのまま十字路の傍に建っている全面ガラス張りの高層ビルに飛びかかる。

両足で上手く壁面に着地したのなら、あとは簡単なことだ。

走る。走る。走る。

地上十五メートルほどの地点を、地球の重力に直交する体勢のまま。

俺はビルの壁面を駆けた。

「――流石だよ、化物」

背後からそんな言葉と共に、俺を追走しだす革靴の音が聞こえた。

――そうだ、追ってこい。

こうして適度に引きつけたまま、攻撃を回避し続けてやるよ。

カテゴリーキラーは、高速で移動する俺に対してなおも銃撃を止めない。俺が踏みしめたガラス窓は、片っ端から奴の弾丸が粉々に粉碎していく。

……まずいな、今少しでも速度を緩めたら、一瞬で文字通り蜂の巣だ。

しかし二十メートルも進むと、ビルの壁にも終わりが来た。

次の建物との間には、六車線以上もある開けた道が横たわっていた。この距離を飛び移るとなると、空中で減速しないようにするのは難しいかも知れない。

かと言つて、悠長に考えている暇もなかった。こうしている今も、カテゴリーキラの弾丸が、背後のガラス窓を穴だらけにしながら接近してくるし、減速しすぎても重力に捕まつて壁面からずり落ちてしまう。

「……くそっ！」

半ばヤケクソになつて、俺は最後の一步を思い切り踏み切つた。

その衝撃に、ビルの窓ガラス——全ての壁面が真っ白にひび割れて、地上に破片の雨を降らせた。

急加速に強い空気抵抗を感じながら、俺は空を飛んだ。

——逃げ切れる、か？

すぐ背後を、無数の弾丸が風切り音と共に通過していく。

そのまま、俺は見事次の建物へ。

コンクリート打ちっ放しの古びた建物へ、飛び移ることに成功した。

「——よしッ……っ！」

しかし。

思わず感嘆の声を上げた俺をあざ笑うかのように。

恐らく、最初からこの瞬間を狙っていたのであろうカテゴリーキラの弾丸が、俺の右足——脹脛を、後ろから捉えた。

弾丸は、曲がりなりにも獣化させた体をさも当然のように抉り、砕き。

傷口からは大量の血が迸った。

「がっ……あ……あ……っ？」

衝撃に足を崩し、急激に減速した俺の体は、真つ逆さまに地面へと落ちて、背中から思い切り歩道と激突した。

「まだまだ甘いな少年、人狼にとって銀がどれだけ致命的な弱点か、分かっちゃあいいい」

カテゴリーキラは、車道の真ん中をゆっくりと歩いて、俺に近づいてくる。

くそ、足が全く動かない。しかも傷口を見るに、弾丸が貫通せず体内に残っている。撃たれたのは脹脛なのに、足全体が動かなくなっているのは、薊の体を今も犯している銀製弾と、この弾丸が同じ効果を持っているからだろう。

人狼の堅牢な筋肉を破る弾丸に、人狼すら行動不能にする神経毒を上乘せしているのだ。

そして何より、傷口からはこの弾丸を抜くことはできない。

「あ、ああああアア……ッッ！」

激痛に思わずうつつすらと涙を浮かべた俺は、撃たれた足を抱えて、どうにかカテゴリーキラーから遠ざかろうと、醜くも四つん這いで進み続けた。

——飛んだお笑い話だな。

今の俺は、まさに痛手を負ったケモノのようだ。

実際に俺は、その滑稽な様に思わず笑みをこぼして。

それから、覚悟を決めた。

四つん這いのまま、右手の指を一直線に揃え——貫手を作って、右膝上数センチの辺りに添える。

あまり迷っている時間はない。こうしている間にも、カテゴリーキラーは俺にトドメを刺そうと近づいてきている。

深く呼吸をして、これからやってくる苦痛を思い、じわりと冷や汗を垂れた。

——嗚呼。

そうだ、俺はケモノだ。

どうせ人間じゃあない。

だが、だつたらいつそのこと、思い切りやらせてもらおう。

中途半端なケモノとなるくらいなら……。

——俺は、バケモノでいい。

人差し指から小指までの四指が、右膝上にずぶりと食い込む。それと同時に、尋常ではない激痛が神経を駆け抜け、脳を襲った。

堪えろ。

堪えろ堪えろ堪えろ。

——痛覚なんてのは、ただの電気信号に過ぎないのだから。

「……………ツツツツッ？!!？」

碎けるほどに奥歯を食いしばって。

俺は右足を——手刀で斬り飛ばした。

ゲームやアニメの世界でしか見たことのない勢いで、断面から大量の鮮血が噴き出し、全身から脂汗が滲んだ。

想像を遥かに超える痛みに、俺の思考はショート寸前だったが、辛うじて意識を繋ぎ止めて。

——そして、カテゴリーキラーに背を向けたまま、再び両足で地面に立った。

「……………何？」

その異様な光景に、カテゴリーキラーも思わず声を上げた。

切断から二秒も経たない内に、俺の右足は生え変わったのだ。

確かに痛みを感じた。

そこら中に血が飛び散っているし。

なんなら元の俺の右足は、今も俺の足元に無造作に転がっているままだ。

しかし、そんな事実など初めから無かったかのように。右膝から下に——むき出しの素肌の新たな右足が、そこにはあった。

「……なるほど驚いた。正直、ここまで再生が速い個体は、君の母以外には見たことがないよ」

カテゴリーキラーは、ひどく平坦な——しかしどこか深刻そうな雰囲気も感じさせる声で、そう言った。

「……いや、俺の方が驚いている自信があるぜ」

振り返って、カテゴリーキラーと正面から対峙する。未だ痛覚の残響が鳴り止まないが、俺は必死に頭を回転させていた。

……全く、バケモノ様様って感じだが、まさかここまでとはな。

しかし油断は出来ない。

さつきは偶々足に当たったから良かったが、もしあれが胴体や頭部だったら、自切はしにくくなる。後者に至っては、恐ろし過ぎてやる気も起きない。

そうそう頻繁に使うべき手段じゃあ無いな。

……さあ。ならばどうするか。

彼我の距離は二十メートル弱、といったところだ。

また背を向けて逃げ出すことは可能だろうが、それだと同じ流れがループで行われるだけ。

逃げて、撃たれて、再生して。この繰り返しだろう。相手は専門家だ、いつかは対策を講じられるかも知れない。

カテゴリーキラーがじりじりとにじり寄って来るだけ、俺も奴と目を合わせたまま後退する。

そうして十歩分ほど、お互いに次の行動を取りあぐねている状態が続いていたが——先に動いたのはカテゴリーキラーだった。

奴は両腕に持っていた拳銃を、突然地面に放り投げたのだ。

「どうやら、コレじゃあ少年を殺し切ることはできないようだ」

ため息をついて——全くやれやれ、とでも言いたげな表情で、カテゴリーキラーは、そうしてフリーになった両腕を、天にかざした。

「——やつぱり、こつちにしようか」

やがて、どこからともなく空を裂いて、奴の真の得物——本当のところは俺も分からないが、少なくとも俺にとって奴の武器と言えば、それだった——巨大な銀の十字架が現れ、黒革のグローブに収まった。

本人の身長の三倍、体重の三乗はありそうなその十字架は、あいも変わらず重厚な存在感と、無機質な殺気を放っている。

「これにて幕引き、だ」

カテゴリーキラーが、十字架を投擲するモーションに入った。

恐らく俺は数秒後、体の大半を吹き飛ばされて、やがて絶命するのだろう。

もしかしたら、避けることもできるかもしれない。だが以前見せられたように、あの十字架は念力のような見えない力で、高精度かつ高速な機動を行う。

素人の俺に、いつまでも回避し続けることは不可能だ。

最早、万策尽きた。

そう見える絶望的なこの場面で。

——俺は、笑った。

「ああ、そうだな、幕引きだ。——俺の勝ちでな」

向かい合う俺達の頭上で。

月のない夜空を、引き裂くような。

大きな亀裂が走った。

其ノ漆

それはあまりにも壮大で。

どこか幻想的な光景でもあった。

ビルの合間から見上げる夜空に、大きな亀裂が走っている。

パキパキ、ピシピシ、と。

樹木のように枝分かれしていく亀裂は、次第に全天を覆っていく。
やがて。

捲れ上がった粉雪のような空の欠片が、俺達の下にゆっくりと降り始めた。

「——馬鹿な、私の結界が……！」

俺はこの時始めて、眼前の男——カテゴリーキラーが、明らかな動揺を見せた様を目撃した。ハットの下の碧い瞳がまざまざと見開かれ、口元は半開きのまま固まっている。

そう、俺たちの狙いは最初から『コレ』にあったのだ。

俺は結界の制限を受けずに人狼の力を解放し、雪ノ下さんは、存在するだけで『世界そのものに大きな悪影響を及ぼす』厄介な結界を処理できる。

それは、雪ノ下さんにしかなできない酷く専門的な技術であり、怪異を始めとする『超常現象の漏洩』を嫌う彼女達『専門家』からすれば、至極当然の行動であった。

簡単なことだ。

これだけの長時間、夜間とはいえ、人口過密国日本の市街地が、電気も交通も人の流れすら停止させられ続ければ、いつか結界の外に誤魔化しきれない『ズレ』が生じる。

催眠や洗脳紛いの力で、人間の意識を操作できたとしても、現実が発生する違和感までもは、流石にカバーしきれまい。

雪ノ下さんは、専門家の一員としての責務を全うするために、俺とカテゴリーキラーの勝敗よりも、結界の破壊を優先した、ということだ。

「……しかしまあ、何をどうしたらこんな馬鹿デカイ結界を壊せるのか、気にはなるけど」

大方、あの時入っていったビルの屋上かどこかで、怪しげな術でも使っているのだろう。

俺は、未だ底が知れない雪ノ下さんの手腕にげんなりとして——それから、正面に立つ男をキツと睨んだ。

自身に向けられる鋭い敵意に、奴——カテゴリーキラも目ざとく反応し、俺を睨み返してきた。その表情には、依然余裕がないように見える……どうやら、結界が壊されたことが相当堪えているようだ。

「……さて。言ったとおり、これでもう俺の勝ちは大方向決まったぞ。どうする」
暫しの静寂。

降りしきる空の破片だけが、俺たちを包むように舞い散って、輝きを放つ。

その間にも、俺は自らの内側で渦を巻いて沸き立つ血流を感じ始めていた。間違いない、結界が効力を失ったことで、俺に備わった本来の人狼の権能が戻りつつある。

——今の俺は、きつと誰よりも強い。

そんな根拠のない——ついでに言えば、柄にもない言葉が、脳裏にふわりと浮かび上がる。

カテゴリーキラーは俺の挑発的な言葉も意に介さず、ゆっくり俯いてから、ハットをつばを摘んで、目深く被り直した。

「——啜えるね」

真つ暗な影に飲まれた奴の口元から、力の籠った声が返ってきた。

僅かにハットをつばから覗く碧い瞳は、憤激と憎悪——それから、確かな焦燥を、それぞれ僅かながら内包しているように見えた。

「素人があまり調子にのつてはいけないよ。言っただろう、私は専門家……君のような狗畜生なんて、数え切れないほど屠ってきたのさ」

カテゴリーキラーは、肩に担いだ巨大なオブジェクト——銀の十字架に手を掛け、身を大きく捻ったかと思うと。

カンフースターが振るうヌンチャクのようなスピードで、かつ空気が爆発するほどの威力を内包したまま、胴回りを軸にぐるりと回転させた。

「十全な力が使えるようになったところで、私と君の間に広がる経験値の差は埋まるまい」

吹き荒れる余波が、空気の波となって俺の頬を撃つ。

「私の仕事は変わらない。君を殺して、人狼の姫も殺して、それから吸血鬼の女王も殺す」

「……………そうかよ」

見かけによらず強情な奴だ。

何をするにしてもどこか業務的なコイツなら、わざわざ負け戦に臨むなんてことはない和高を括っていたが——或いは、そうせざるを得ない事情でもあるのだろうか。

自分の命より大事な。

仕事の先にある、成就すべき願いが。

——いや、まさかな。

こんな人間のクズに、そんなものが存在するはずもない。現に俺は、奴の身勝手な行動で、一度命を落とす羽目になっているではないか。

ともかく……………然るべき報いを与える必要がある。

その不敵な笑みを。

男前な顔立ちを。

どこか余裕を感じさせるその立ち姿を。

全部めちやめちやに歪めて、泣きながら詫びてもらおう。

——それに。

「……………悪イ、もう我慢でキねえ」

そろそろ、俺の理性が限界を迎えそうだ。

「……………ツツグ、ぐぐぐぐぐぐああッ!!?」

突如、体を内側から破裂させる勢いで、俺の中の血流が暴れ狂い出した。俺の元から制御が離れた手足が、落雷に撃たれたかの如く痙攣し、意識は既に半ば以上が真っ白に染め上げられ始めている。

間違いない。

人狼の力が、暴走しかけているのだ。

薊が、余程のことがない限り人狼が自らの力に飲まれることはない、と言っていたのを思い出す。しかし、思えばそれは一般的な人狼の話、生まれたてで未熟者の俺ともなると、こういうところもある——のだろうか。

「グ……………るるるルルルルルアア……………ツツ」

体の芯が焼き尽くされるような滾りに、思わずうずくまる。それでも俺の全身は、みちみちと音を立て、一回り、また一回りと、脈動に合わせて肥大化を始めた。

カテゴリーキラーはそんな俺を見て目を丸くしながらも——やはりそこはプロ。明らかに当人も予期せぬ事態を迎えている俺を、一撃で仕留める絶好のチャンスと見たのだろう。

「獣の本能が理性を焼いているのか……………さぞや苦しいのだろうね」

折り曲げた膝で辛うじて地面に立ち、燃え上がる体を冷まさそうと胸板に爪を立て、

狂ったように掻き巻る。

苦しい。

苦しい。

苦しい。

眼球が裏返つてしまうほどに。

熱い。

熱い。

熱い。

まるで火達磨にでもなつたかのようだ。

「——ア……アア……が……」

もはや俺の肺は、隙間風のように掠れた音しか出せない。

それでも、そんな俺の事情など知らないと言わんばかりに、内側に籠る熱で霞む視界

——その隅で、奴の両腕が大きく振り抜かれたのが見えた。

一瞬の後。

轟音を引き連れて、銀十字が俺に殺到する。

「もう、楽におなり」

憐れみか、それとも嘲笑か。

カテゴリーキラーがどんな声色でそう言ったのか、既に俺には分からなくなっている。

「ガアアアアアツツ!!?!!?」

激突。

迸る衝撃波。

鳴り響く破砕音。

道路の端に植えられた木々が、ざわざわと騒ぎ立て。ビルの窓ガラスが方々で、ひとりに碎け散る。

ただし、そんな破壊の渦の中で。

俺は何の痛みも感じていなかった。

「……………な……………ん……………」

辛うじて捉えられたのは、カテゴリーキラーが浮かべた、本日二度目の、動揺の表情。……まあ、そりゃあ驚くだろうな。

俺は、飛来する大質量の金属塊——十字架の先端を、右手五本の指を半ばまで突き立て、しっかりと握り込んで威力を殺し、完全に受け止めていた。

自分でも、現状の俺がそんな精密な動きをできる状態に無かったことは分かる。

しかし身体が、俺の意思とは裏腹に、まるで別人の意識が神経に乗り移って、勝手に

動かしてしまったかのように。カテゴリーキラーの攻撃を、無傷の内に受け切っていたのだ。

「……規格外だ……」

カテゴリーキラーの動揺が、明らかな焦燥に色を変えていく。謀らずして武器を取り上げられてしまい、フリーになった奴の両腕は、腰に掛けてあった二丁拳銃を掴んだ。

「……人狼の姫、その仔……いや」

未だ、皮膚を焼く滾りは消えない。

それでも、体だけが意識を離れて一人で動き出す。一步、また一步と前へと踏み込み、その分だけカテゴリーキラーがじりじりと後退する。

その光景を俺は、まるでテレビの向こう側をぼーっと眺めるかのように。

「——人狼の、王」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!?!!?」

画面の向こうの俺が、雄叫びをあげた。

それはどこか、オーバーヒートを迎えたエンジンから吹き出される排気ガスを彷彿とさせる。

剛腕が、握りこんでいた十字架を出鱈目に放り投げた。ただそれだけの動きで、砲弾をも凌ぐ速度の鉄塊と化した十字架は、ビルの壁面を突き破り、瓦礫に埋もれていった。

ふと、俺は俺の掌を見た。

真つ黒な体毛。両手10本の指には、それぞれアーミーナイフのような爪が鈍く光を放っている。

今度は少し首を捻って、ビルのガラスに映り込んだ自身の姿を見た。

やはり全身を覆う黒の体毛。首から上は、完全に獣——人間社会に慣れ親しんだ『犬』とは違う、禍々しいまでの野生を感じさせる狂相。

一回り以上大きくなった身体は、身に纏った衣類を内側から裂かんばかりに怒張している。

吹き荒ぶ暴風がカテゴリーキラーにもぶつかり、奴のハットを空高く舞い上げ——窶れた西洋人の素顔を露わにした。

——蹂躪が始まる。

カテゴリーキラーは、恐らく俺に齒が立たないだろう。

潰され。

碎かれ。

壊される。

ここに、俺の目的は果たされるのだ。

——そんなことを、他人事のように思いながら。俺の意識は、俺自身の体から、だん

だんと遠退いていった。

其ノ捌

その感覚を、何と言ひ表したものでらうか。

——そう。

それはまるで高熱の水銀、熱と不快な粘着質が縋い交ぜになった何かに、頭蓋の内側を満たされているかのような。

ともかく意識はその間ずっと不鮮明で、正常な思考回路を取り戻すまで何分、何時間経ったのかも分からないまま、気が付けば俺はアスファルトに仰向けで倒れていた。

「……は……」

自分が今どういう状況なのか、いったいどういう事情があつて現在に至るのか。記憶を掘り起こしていくとすぐに思い出せたので、ひとまず安心した。

全身から力が抜け落ち、骨の奥まで浸透している倦怠感が、依然俺の体を地面に縫い付けている。ふと眼球だけを左右に振って辺りを見回すと——相変わらず人工光の無い夜空の下で、存外、街は元のまっさらな状態を保っていた。意識が飛ぶ前の一悶着で起こった破壊の跡こそ見られるものの、俺が覚えのないこと——新たにビルが倒壊しているだとか、電柱がひしゃげているとか、道路がぼっくり割れているだとか、そんな痕は見当たらない。つまりは、俺がかの野菜王国戦闘民族が満月を見た時の如く、傍迷惑

な大暴れを演じることなく、事なきを得たということ……つて。

いや、それはそれでおかしくないか。

人狼に転じる瞬間。あの時感じた全身に漲る力は、それこそ俺の理性がぶっ飛ぶほどの人外の力だ。そんなものが俺のコントロールから外れて、街中で放たれたんだぞ。それが、こんなチリ一つ舞わない結果に落ち着くなんてはずがない。

「……………何が、どうなつてんだ……………」

とにかく体を起こそうと試みるが、異常なまでの疲労が俺の駆動を鈍らせる。気合を振り絞り、なんとか上半身だけを起こすと、まん丸い満月の光に照らし出され辺りがより鮮明に見渡せた。

やはり、特筆すべき破壊痕は見当たらなかつたが——代わりに俺の瞳は、見過ごせそうもない物体を新たに見つけた。

全身をボロボロに擦り減らしたカテゴリーキラーが、仰向けに倒れている。

傍に打ち捨てられた奴のハットは、鋭利な刃物で切り付けられたかのような痕を残し、夜風に頼りなくそよいでいる。

「———」

咄嗟に目に入った外敵の姿に俺は思わず息を呑むが、遠目にびくりとも動かないカテゴリーキラーの体を見て、平静を取り戻し——人狼と化した俺の聴覚が、奴の微かな呼

吸音を捉えた。

それから、俺は大きく胸をなで下ろした。

もはや奇跡としか言えないかもしれないが、どうやら俺の当初の『目論見』は上手くいったようだ。

軋む全身に鞭打ち、一步また一步とカテゴリーキラーに歩み寄った俺は、精一杯顔面を精悍に強張らせる。

「……………よお、生きてんな」

俺の声に、コートの袖から覗いていたカテゴリーキラーの指が僅かに動いた。

「……………どういう、つ……………もりだい？」

カテゴリーキラーの顔には、全身の裂傷に比べて微かな擦り傷程度しか見当たらず、寡れた双眸からは、限界まで磨耗した緊張感が覗いていた。

「なんだ、言葉が喋れる程度には余裕あんじゃねえか。もう少し殴った方が良かったか」
「……………それは勘弁…願いたい」

そうかよ、と適当に返事を返す。

俺は今一度辺りを見回すが、やはり目立った破壊の後は見当たらない。

それが指すことはつまり、『勝敗が一瞬で決した』と言うことなんだろう。余計な損害を生む間も無く、敵が足掻く術すら残さず、俺はまさしくカテゴリーキラーを圧倒した

のだ。

報復を成してスッキリすべきなのだろうが、その間に俺自身記憶が全くないため、まいち釈然としない。

俺はボロボロにほつれた袖の下の、傷一つない——いや、傷一つ『なくなつた』手で、後ろ頭をぼりぼり搔いた。

「……別に、俺は俺が思う以上に臆病だった、つてだけの話だ。本当は一思いにぶつ殺すつもりだったんだけどな」

吐き捨てるような俺の言葉に、カテゴリーキラが顔色を変える事はなかった。或いは、顔色を変える力も残されていなかったのかは分からない。

だが、そんな事は今はもうどうでもいいのだ。どうせこの男はもう動けない。ここから先は、紀元前から繰り返されてきた人間同士の闘争において、勝者が、無力化された敗者に対して与えることのできる——至極当然の権利を、俺は行使する。

「本題はここからだ。今からお前に、俺がずっと引つかかつてることを質問する。……返答によつては、ろくな死に方はさせないつもりだ」

この男の生殺与奪権は、既に俺の手中にある。

泣いて詫びながら靴を舐めさせることも、考えうる最悪の屈辱を与えてから薊の前に引きずり出すこともできるが、そんな一時の優越感に浸って、本来の目的を忘れちゃあ

いけない。

「……良いだろう、勝者は君だ、謹んでお受けしよう」

カテゴリーキラーが応える。

俺は胸中に燦る疑問——この巫山戯た三流伝奇譚のような現実にあつて、ずっと聞き
たかつた質問を口にする。

「……………お前、薊に何をしたんだ。命を狙われるほどのことを、本当にしたのか」

——暫しの沈黙。

夜の街に染み入るような無音が続く。

十秒か一分か、カテゴリーキラーが漸く口を開いた時、最初に俺の耳に入ったのは、乾
いた笑い声だった。

「は、は……………は……………そうだね。そういえばまだ君に語つてはいなかったか」

体を仰向けに投げやった体勢のまま、カテゴリーキラーがコートの内ポケットに手を
突っ込んで、ゴソゴソと何かを探っている。

俺は一瞬身構えたが、ふわりと柔らかな放物線を描いて俺の元へ投げ込まれた『ソレ』
を受け取り、恐る恐る眺め、漸く警戒を解く。

なんて事は無い。特に攻撃的な仕掛けもありそうにない、赤い液体が封入された試験
管だった。

「それがあの女の狙いさ」

……いまいち話が見えてこない。

俺が訝しげに眉を潜めるのが見えたのか、カテゴリーキラーは苦しげに小さく咳払いをする、再び口を開く。

「あの女、『人狼の姫』の血だよ。不死身の怪物の血液が持つ効力なんて、わざわざ説明しなくても大方察しはつくだろう。君にだって既に経験があるはずだ」

「……不老不死の怪異、の血液。あの馬鹿げた治癒力の事か」

俺はそう答えながら、脳裏にチラつく雪ノ下さんのすらりとしたエロ——、じゃなくていやらし——、……綺麗な脚を思い出した。人狼の血が持つ仙豆も涙目な回復力は、既に身を以て体験しているし。

要はこの男、この血を第三者に売って金儲けでもしようかと企んでいたのだろうか。だとしたら俺も納得の屑野郎だし、このまま然るべき報いを与えるのもやぶさかでは無いんだが。

しかし、そう思つて睨みつけたカテゴリーキラーの顔は、またしてもこの男らしからぬ——そんなことを言えるほどこの男のことは知らないが——予想だにしない表情を浮かべていた。

涙を流しているのだ。

悪辣、軽薄、外道の男。

そう俺が判断したはずの男が、それらの悪性とはかけ離れた表情で、静かに頬を濡らしている。

「少年。『これから死にゆく男』から最後の頼みだと思つて、どうか私の願いを聞き届けてはくれまいか」

それは、とても穏やかで優しい。

何かを達観しているような、何かを諦めてしまったかのような。物悲しさに縁取られた、優しい声だった。

「……あ？」

わずかに混乱した俺は、カテゴリーキラーの言葉に思わず過剰反応する。

一体どういうことだ、何故そんな顔をしている。俺を殺した癖に、一方ではそんなに綺麗な涙を流すのか。

——ふざけんじゃねえぞ。

「いや、何も言わなくてもいい。君が思うことは至極当然だ。それだけの事を私が君にしたのも分かつている。……ただ君は突如投げ込まれたこの異常な世界の中でも見失うことのない、確固たる倫理観を持っている」

いつの間にか拳を握りこんでいた俺に対して、なおもカテゴリーキラーは穏やかな声

色で言葉をかける。

「そんな君のどこまでも甘い人間性を見込んでのことだ。どうか私がこの世で最も大事にしているモノを、助けてくれ」

ふ、と。

今度は在りかを探ることも無く、カテゴリーキラーがコートの内ポケットから、小さくて薄い、ポロポロに擦り切れた紙片を投げてきた。

俺はその紙片を、拳を解いた掌で捕らえる。そつと手の内のそれを覗き込むと——
写っていたのは、とても綺麗な女性と、その足元に座り込んだ年端もいかない少女。

「娘と、妻だよ」

俺の頭の中は真っ白になった。

俺自身、思考回路が正常に働いていないことも、目の前の現状を理解しきれていないことも分かる。それでも俺の面目は、紙面の向こうから満面の笑みを浮かべてこちらを見ている二人の女性に、釘付けになってしまった。

「銀の弾丸は、ついさつき無効化された……私の生命力、つまりは心臓の鼓動を呪いの源にしているからね。私の心拍数が一定以下になると、自動で……解除されてしまう」

カテゴリーキラーの声色に、かすかな嗚咽が混じり始めた。

「私はもう助からない。だがどうか……どうか……どうか……頼む……私は……」

心臓が早鐘を打つ。

——分かってしまうからだ。

頭はこんなにも混乱しているはずなのに、人狼の五感が、これから何が起こるのかを俺に伝え始めている。

遠く遠く、まるで地下から響いてくるかのような、くぐもった爆裂音。瓦礫の海をかき分けて、猛烈に速い『ナニカ』が空に飛び出した。

そのまま。

風邪を切る音、遙か上空。

風上から漂い始めた、梶の薫り。

天から現れた、地獄の使者の高笑いが木霊している。

俺は必死になって、カテゴリーキラの次の言葉を待った。

「おい待て、なんだお前!!? さっきから一体どういうつもりで……——」

瞬間、空気の壁が俺の全身を打った。

一拍遅れてやってきた、爆音、轟音。

カテゴリーキラーが寝転んでいたはずの地点から弾けた、コンクリートの破片と、肌を焼く熱風が、俺を飲み込む。

「——ッッ?　　ッ?　　?」

まるで地球そのものが爆発したかのような衝撃。方向感覚を失って、全身に鋭い痛みを感じながら、俺の身体は地面をボールのようにゴロゴロ転がり、道路脇のガードレールにぶつかってようやく止まった。

「ハ、ハハ、ハハハ、ハハハハハハ!!?」

周囲に噴煙が立ち込める中、次第に小さくなって行く轟音に反比例するかのごとく、けたたましい高笑いも聞こえてくる。

間違いない、この声の主は——

「ようやった、八幡!!?　　ぬしは自慢の息子だ!!?」

煙の向こうから、銀髪を翻す軍服の女が現れた。人狼の姫——薊は、そのゾツとするほど美しい相貌に満面の笑みを浮かべ、俺の胸に飛び込んでくる。

「……あ、ざみ……」

俺は両手をだらりと下げたまま、棒立ちで薊の抱擁を受け止めた。立ち姿の彼女からは、地下鉄倉庫の血塗れの寝姿に覚えた——不安定で儂げな雰囲気など微塵もない。す

らつと伸びた華奢な四肢に、少し尖った印象の美顔、身長はほぼ俺と同じか、俺より数センチ高い。

いや、そんなことはどうでもよくて。

徐々に煙が晴れ、鮮明になつて行く視界に移つたのは、道路のど真ん中に穿たれた、巨大なクレーター。

薊は銀の弾丸が効力を失つてすぐ、地下鉄から文字通り『飛び出した』のだろう。人の脚力で、たつた数歩のうちに、ビルの建ち並ぶ街中を飛び跳ねて。

そして、遙か上空から降り注ぐ隕石のように、カテグリーキラーを圧殺した。

当然、その爆心地にいたはずの男は見る影もない。恐らくバラバラに千切れて、粉々に飛び散つたのだ。実際に目にする事はなかったその瞬間を想像して、幼い頃感じた、貧血に近い突発的な目眩が俺を襲う。

「ようやく煩わしい面倒ごとを一つ片付けられた。体は快調！　銀の呪いはぬしのおかげで完全に解けたし、この男も無事処分したしな！」

薊はそう言つてはしやぎ、真つ白い頬を俺の首元に何度も擦り付ける。まるで大型犬のような感情表現の仕方だとは思つたが、生憎今の俺にそんなことまで逐一反応する余裕はなかった。

「……………おい、」

「そうだ！　吾輩から礼をしよう！　何か欲しいものはあるか八幡、すぐに吾輩が用立ててやるぞ！」

俺の声を遮り、更にトーンの上がった声色で、まくしたてるような薊の言葉が続いた。輝く表情は、我が子を慈しむ母親のようで、恋人と再会した少女のようにも見える——ともかく凄惨なまでの笑顔。

俺はその笑顔の真意を——薊の真意を汲みかねて、ぐちゃぐちゃでまとまらない思考もそのままに、薊の肩を掴んでそのまま俺の体から引き剥がした。

「待てツ!!?!?!?!」

「……なんだ、どうした」

今度は幼子のように無垢な表情で、薊はじつと俺の目を見つめ返してくる。自分でも何故か分からない——だが薊のその目を見た時、薊の肩を掴む腕に、いつそう力を込めてしまった。

「最初から全部説明しろ、カテゴリーキラーのことも、お前のことも!!?!」
わずかな沈黙。

薊の表情が、水を打ったように静まり返る。

俺はその様に刹那の悪寒を覚えたが、しかしすぐに、薊またへにやりと笑みを作った。

「それならとつくにしただろう。吾輩はこの男に奪われたモノを取り返そうと……」

「まさか……『コレ』のことじゃあねえだろうな」

俺は右手に持ったカテゴリーキラーの封入瓶を、薊にかざして見せる。

「おお、それだそれだ。やはり優秀だな八幡、よくぞ持ってきてくれた！
輩としたことが寝込みを狙われ、まんまとしてやられたものだ」
いやあ吾

……なんだそれは。

「なんなんだよお前……意味わかんねえぞ、なんでこの程度のモノをそこまでして奪い返そうとするんだ。それに、コレはお前にとってそんなに大きな損失なのか？
カ
テゴリーキラーからすればコレは……ッ」

胸を締め付ける思いが、俺の喉をも締め付けたのか、思わず言葉に詰まる。

「きつとコレは、奴が家族の命を救うために必要だったものだ!!？」
でもお前に

とつちやあ、ほんの少し体を開けばいつでも手に入るものだろ!!？」

そうだ。

街中で時々見かける、献血の募集。アレに並んでいる奴らは、自分の血が何処の誰の為になるかも分からないにも関わらず——それでも、『まだ見ぬ誰かの為に』——そう願
い、自ら献血に赴いているのだ。

それだけ、これは、その程度の話。

「なんで、分けてやろうと思わなかった!?」

しかし、それまでの俺は忘れていたのだ。

人間が、そんなに都合良く、互いを理解し合えるわけがない。今まで何度だって、実感を持ってそれを知っていたはずの俺が、何故こんなことを失念してしまったのか。

自分にとっての当たり前が、誰かにとってもそうであるとは限らない。ましてや、生物の垣根が違うのなら、その差はより顕著なものになるだろう。

やがて薊が放った言葉に、俺はそれを思い知らされることとなった。

「吾輩がそこまでする価値が無いからだ」

薊の表情は明るくない。

だがしかし、特別怒っているわけでもなさそうだった。聞き分けのない子供を諭すよ
うな——申し訳程度眉を蹙めた顔で、ただじつと俺を見つめている。

「お前はこれから喰う豚が失血で死にかけているからと言って、自分の体から血を抜き
取って輸血してやるのか? そんなことをする手間があるなら、死にかけているそ
の場で殺すだろう」

薊が何かを言っている。

それはきつと、薊にとつての『当たり前』だ。

「何を勘違いしている八幡。我ら人狼にとつて人間などそれほど取るに足らない存在な

のだ。地を這う虫、生い繁る雑草、それらと並んで立つほどに、吾輩から見た『人間』など、悉く無価値」

それでも、俺にとっては『当たり前』じゃ無い。

信じられない、信じたく無い。

よく知りもしない相手を勝手に解釈して、今まで何度痛い目を見たか——やはり俺は忘れてしまったのだろうか。

俺は勝手に、薊の——あの血みどろの姿に、痛みに喘ぐ苦悶の顔に、カテゴリーキラーを恨む正当な理由と道理があるのだと信じ込んでいた。

「……だとしても、何故国を幾つも跨いでまで追い続けた。

カテゴリーキラー

が取るに足らない存在だったと言うなら、そこまでして追いかける理由も……」

本当は、こんな質問をする意味など無いと自分でもわかっていた。どんな返答が来ようと、今更何かが変わるわけもないのだから。

「おお、それに関しては良い例え話を思い付いたぞ」

はっとした顔で、薊が指を鳴らした。

「自分の血を吸った蚊を、わざわざ生かして返そうと思うか？」

「……………もう、良い……………」

力なくそう答えた。

いつだってそうだった。

勝手に信じて、勝手に裏切られて。

そうして今回もまた、俺は勝手に塞ぎ込む。

俺は薊に背を向けて、ゆっくりと歩き始める。

「おい、どこへ行く」

「……………お前には関係ねえ」

胸に燻る、堪え切れない虚無感を抱えたまま。

封入瓶を右手に握りしめて。

ほんの一縷の希望だけを糧に、俺は何処かも分からない——あの男の大事な人達が待

つ場所へ向かう。

「あの男の娘なら、とうに死んでいるが」

……嗚呼。

「吾輩に追われてばかりで故郷の家族の元へ帰れなかった数年の間に……相当悪性の病だつたようだ、勝手に死におつた。流星に傑作よなア、奴の、ありもしない希望に縋り続ける憐れな姿は」

もういい。

「本当なら吾輩が直々に真実を伝えてやろうとも思つたが、うつかりその前に殺してしまつたことだけが心残りだな」

もうたくさんだ。

ぐらぐらと揺れる視界の中、俺は封入瓶をそつと足元に置いてから——爆速で来た道に戻つて、薊に全力の右ストレートを叩き込んだ。巨岩同士がぶつかり合うような鈍い音が俺の鼓膜に打ち付ける。

「親に手を挙げるな、痴れ者」

目の前にあつたのは、人狼の姫の底冷えする美貌。髪も眉も齒も、全て初雪のように真つ白だ。

薊は、何処にそんな脅力が隠されているのか分からない細い指で、俺の拳を万力のよ

うにガツチリと受け止めていた。

「八幡、ぬしにはわからんだろうが、吾輩はこれでもかなりぬしを気に入っているのだ。このままぬしを手離すなんて選択肢は、はなから存在しない」

薊は緩やかな挙動で俺の拳を引き寄せて、鼻先が俺の首元に付くギリギリまで肉薄して来た。梶の花の香りと、生温い吐息が俺の感覚を刺激して、悪寒が背筋をぞわぞわ撫で上げる。

「お前の価値観を無理矢理にでも捻じ曲げてやろう。百回やそこら殺せば、流石に考えを改めるはずだ」

全身の毛が逆立って行くのが分かった。

獣の本能が、俺の選んだ選択肢を全力で否定して、危険信号を送っているのだと感じた。

「……ガタガタうるせえよ野良犬風情が」

それでも、仮に俺のこの選択肢が、間違っているとしてみただ。

だから何だ。

理屈だの運命だのに振り回されるのは、もうたくさんなんだよ。今日だって、俺が一体何をしたわけでもないのに。

偶々地下鉄で『男』出会う。

偶々『女』に殺され。

まともに喧嘩もしたことの無いのに、成り行きで命を賭けた鬪いに巻き込まれた。仇だと思つてた男は実はそんなに悪いやつではなくて。

一方で憎めないと思つてた女は価値観が破綻した異常者で。

——ふざけんじゃねえぞ。

何で俺ばかりこんな目に合う。

本当はもつとスマートに生きたい。

腐らずに生きていたかった。

そう、これは完全な八つ当たりで、俺のロクでも無い人生の中で蓄積されて来た鬱憤が噴き出しただけ。それだけが今この場で、俺を突き動かす原動力だ。

何が正しいのなんてのは、どうでもいい。

「ハ、ハハ、ハハハ、ハハハハハハハ!!?」

大音量の薊の高笑いが耳元で響いて、俺の脳を揺らした。そして薊は、俺の手を離れたかと思うと、アスファルトを踏み碎いてひとつ跳び——大きく距離を取ると、細く繊細な指で両拳を握り込んだ。

薊も始めるつもりなのだ。

俺を屈服させるために——更生させるために、力を持ってねじ伏せる気だ。

「さあ、我が覇道の前に露と消えるがいい!!?」

愚息よ!!?」

唄でも歌うかのように。

高らかな声が街に響き、空気をギシギシと揺らした。

薊は中腰に落とし、両手をだらりとぶら下げた独特の構えを取った。ノーガードのよ
うに見えて、何故か一分の隙も感じさせない。『人狼の姫』も本気なのだと、今になって
冷静に現状を判断してしまう。

「死ぬのはてめえだ、このクソ親が!!?」

それでも、前に進むもうとする右足を俺は止められない。

彼我の距離は二十メートル強。

つま先に全体重を預け、加速を開始。

大地を砕き、一步目を踏み出す。

そして俺は、音速を超えた。

その感覚を、何と言ひ表したものでらうか。

——そう。

それはまるで高熱の水銀、熱と不快な粘着質が縋い交ぜになつた何かに、頭蓋の内側を満たされているかのような。

ともかく意識はその間ずっと不鮮明で、正常な思考回路を取り戻すまで何分、何時間経つたのかも分からないまま、気が付けば俺はアスファルトに仰向けで倒れていた。

「……は……」

自分が今どういう状況なのか、いったいどういう事情があつて現在に至るのか。記憶を掘り起こしていくとすぐに思い出せたので、ひとまず安心した。

全身から力が抜け落ち、骨の奥まで浸透している倦怠感が、依然俺の体を地面に縫い付けている。ふと眼球だけを左右に振つて辺りを見回すと——相変わらず人工光の無い夜空の下で、存外、街は元のまっさらな状態を保つていた。意識が飛ぶ前の一悶着で起こつた破壊の跡こそ見られるものの、俺が覚えのないこと——新たにビルが倒壊しているだとか、電柱がひしゃげているとか、道路がぼっくり割れているだとか、そんな痕は見当たらない。つまりは、俺がかの野菜王国戦闘民族が満月を見た時の如く、傍迷惑

な大暴れを演じることなく、事なきを得たということ……つて。

いや、それはそれでおかしくないか。

人狼に転じる瞬間。あの時感じた全身に漲る力は、それこそ俺の理性がぶつ飛ぶほどの人外の力だ。そんなものが俺のコントロールから外れて、街中で放たれたんだぞ。それが、こんなチリ一つ舞わない結果に落ち着くなんてはずがない。

「……………何が、どうなつてんだ……………」

とにかく体を起こそうと試みるが、異常なまでの疲労が俺の駆動を鈍らせる。気合を振り絞り、なんとか上半身だけを起こすと、まん丸い満月の光に照らし出され辺りがより鮮明に見渡せた。

やはり、特筆すべき破壊痕は見当たらなかつたが——代わりに俺の瞳は、見過ごせそうもない物体を新たに見つけた。

全身をボロボロに擦り減らしたカテゴリーキラーが、仰向けに倒れている。

傍に打ち捨てられた奴のハットは、鋭利な刃物で切り付けられたかのような痕を残し、夜風に頼りなくそよいでいる。

「……………」

咄嗟に目に入った外敵の姿に俺は思わず息を呑むが、遠目にぴくりとも動かないカテゴリーキラーの体を見て、平静を取り戻し——人狼と化した俺の聴覚が、奴の微かな呼

吸音を捉えた。

それから、俺は大きく胸をなで下ろした。

もはや奇跡としか言えないかもしれないが、どうやら俺の当初の『目論見』は上手くいったようだ。

軋む全身に鞭打ち、一步また一步とカテゴリーキラーに歩み寄った俺は、精一杯顔面を精悍に強張らせる。

「……………よお、生きてんな」

俺の声に、コートの袖から覗いていたカテゴリーキラーの指が僅かに動いた。

「……………どういう、つ……………もりだい？」

カテゴリーキラーの顔には、全身の裂傷に比べて微かな擦り傷程度しか見当たらず、寡れた双眸からは、限界まで磨耗した緊張感が覗いていた。

「なんだ、言葉が喋れる程度には余裕あんじゃねえか。もう少し殴った方が良かったか」
「……………それは勘弁…願いたい」

そうかよ、と適当に返事を返す。

俺は今一度辺りを見回すが、やはり目立った破壊の後は見当たらない。

それが指すことはつまり、『勝敗が一瞬で決した』と言うことなんだろう。余計な損害を生む間も無く、敵が足掻く術すら残さず、俺はまさしくカテゴリーキラーを圧倒した

のだ。

報復を成してスッキリすべきなのだろうが、その間に俺自身記憶が全くないため、まいち釈然としない。

俺はボロボロにほつれた袖の下の、傷一つない——いや、傷一つ『なくなった』手で、後ろ頭をぼりぼり搔いた。

「……別に、俺は俺が思う以上に臆病だった、つてだけの話だ。本当は一思いにぶつ殺すつもりだったんだけどな」

吐き捨てるような俺の言葉に、カテゴリーキラーが顔色を変える事はなかった。或いは、顔色を変える力も残されていなかったのかは分からない。

だが、そんな事は今はもうどうでもいいのだ。どうせこの男はもう動けない。ここから先は、紀元前から繰り返されてきた人間同士の闘争において、勝者が、無力化された敗者に対して与えることのできる——至極当然の権利を、俺は行使する。

「本題はここからだ。今からお前に、俺がずっと引つかかっていることを質問する。……返答によっては、ろくな死に方はさせないつもりだ」

この男の生殺与奪権は、既に俺の手中にある。

泣いて詫びながら靴を舐めさせることも、考えうる最悪の屈辱を与えてから薊の前に引きずり出すこともできるが、そんな一時の優越感に浸って、本来の目的を忘れちゃあ

いけない。

「……良いだろう、勝者は君だ、謹んでお受けしよう」

カテゴリーキラーが応える。

俺は胸中に燻る疑問——この巫山戯た三流伝奇譚のような現実にあつて、ずっと聞きたかつた質問を口にする。

「……………お前、薊に何をしたんだ。命を狙われるほどのことを、本当にしたのか」

——暫しの沈黙。

夜の街に染み入るような無音が続く。

十秒か一分か、カテゴリーキラーが漸く口を開いた時、最初に俺の耳に入ったのは、乾いた笑い声だった。

「は、は……………は……………そうだね。そういえばまだ君に語つてはいなかったか」

体を仰向けに投げやった体勢のまま、カテゴリーキラーがコートの内ポケットに手を突っ込んで、ゴソゴソと何かを探っている。

俺は一瞬身構えたが、ふわりと柔らかな放物線を描いて俺の元へ投げ込まれた『ソレ』を受け取り、恐る恐る眺め、漸く警戒を解く。

なんて事は無い。特に攻撃的な仕掛けもありそうにない、赤い液体が封入された試験管だった。

「それがあの女の狙いさ」

……いまいち話が見えてこない。

俺が訝しげに眉を潜めるのが見えたのか、カテゴリーキラは苦しげに小さく咳払いをする、再び口を開く。

「あの女、『人狼の姫』の血だよ。不死身の怪物の血液が持つ効力なんて、わざわざ説明しなくても大方察しはつくだろう。君にだって既に経験があるはずだ」

「……不老不死の怪異、の血液。あの馬鹿げた治癒力の事か」

俺はそう答えながら、脳裏にチラつく雪ノ下さんのすらりとしたエロ——、じゃなく、いやらし——、……綺麗な脚を思い出した。人狼の血が持つ仙豆も涙目な回復力は、既に身を以て体験しているし。

要はこの男、この血を第三者に売って金儲けでもしようかと企んでいたのだろうか。だとしたら俺も納得の屑野郎だし、このまま然るべき報いを与えるのもやぶさかでは無いんだが。

しかし、そう思つて睨みつけたカテゴリーキラの顔は、またしてもこの男らしからぬ——そんなことを言えるほどこの男のことは知らないが——予想だにしない表情を浮かべていた。

涙を流しているのだ。

悪辣、軽薄、外道の男。

そう俺が判断したはずの男が、それらの悪性とはかけ離れた表情で、静かに頬を濡らしている。

「少年。『これから死にゆく男』から最後の頼みだと思つて、どうか私の願いを聞き届けてはくれまいか」

それは、とても穏やかで優しい。

何かを達観しているような、何かを諦めてしまったかのような。物悲しさに縁取られた、優しい声だった。

「……あ？」

わずかに混乱した俺は、カテゴリーキラの言葉に思わず過剰反応する。

一体どういうことだ、何故そんな顔をしている。俺を殺した癖に、一方ではそんなに綺麗な涙を流すのか。

——ふざけんじゃねえぞ。

「いや、何も言わなくてもいい。君が思うことは至極当然だ。それだけの事を私が君にしたのも分かっている。……ただ君は突如投げ込まれたこの異常な世界の中でも見失うことのない、確固たる倫理観を持っている」

いつの間にか拳を握りこんでいた俺に対して、なおもカテゴリーキラは穏やかな声

色で言葉をかける。

「そんな君のどこまでも甘い人間性を見込んでのことだ。どうか私がこの世で最も大事にしているモノを、助けてくれ」

ふ、と。

今度は在りかを探ることも無く、カテゴリーキラーがコートの内ポケットから、小さくて薄い、ボロボロに擦り切れた紙片を投げてきた。

俺はその紙片を、拳を解いた掌で捕らえる。そつと手の内のそれを覗き込むと——写っていたのは、とても綺麗な女性と、その足元に座り込んだ年端もいかない少女。

「娘と、妻だよ」

俺の頭の中は真っ白になった。

俺自身、思考回路が正常に働いていないことも、目の前の現状を理解しきれていないことも分かる。それでも俺の両目は、紙面の向こうから満面の笑みを浮かべてこちらを見て二人の女性に、釘付けになってしまった。

「銀の弾丸は、ついさつき無効化された……私の生命力、つまりは心臓の鼓動を呪いの源にしているからね。私の心拍数が一定以下になると、自動で……解除されてしまう」

カテゴリーキラーの声色に、かすかな嗚咽が混じり始めた。

「私はもう助からない。だがどうか……どうか……どうか……頼む……私は……」

心臓が早鐘を打つ。

——分かってしまうからだ。

頭はこんなにも混乱しているはずなのに、人狼の五感が、これから何が起こるのかを俺に伝え始めている。

遠く遠く、まるで地下から響いてくるかのような、くぐもった爆裂音。瓦礫の海をかき分けて、猛烈に速い『ナニカ』が空に飛び出した。

そのまま。

風邪を切る音、遙か上空。

風上から漂い始めた、梔の薫り。

天から現れた、地獄の使者の高笑いが木霊している。

俺は必死になって、カテゴリーキラーの次の言葉を待った。

「おい待て、なんだお前!!? さっきから一体どういうつもりで……——」

瞬間、空気の壁が俺の全身を打った。

一拍遅れてやってきた、爆音、轟音。

カテゴリーキラーが寝転んでいたはずの地点から弾けた、コンクリートの破片と、肌を焼く熱風が、俺を飲み込む。

「——ッッ?——ッ?——?」

まるで地球そのものが爆発したかのような衝撃。方向感覚を失って、全身に鋭い痛みを感じながら、俺の身体は地面をボールのようにゴロゴロ転がり、道路脇のガードレールにぶつかってようやく止まった。

「ハ、ハハ、ハハハ、ハハハハハハ!!?」

周囲に噴煙が立ち込める中、次第に小さくなって行く轟音に反比例するかのごとく、けたたましい高笑いも聞こえてくる。

間違いない、この声の主は——

「ようやった、八幡!!?」ぬしは自慢の息子だ!!?」

煙の向こうから、銀髪を翻す軍服の女が現れた。人狼の姫——薊は、そのゾツとするほど美しい相貌に満面の笑みを浮かべ、俺の胸に飛び込んでくる。

「……あ、ざみ……」

俺は両手をだらりと下げたまま、棒立ちで薊の抱擁を受け止めた。立ち姿の彼女からは、地下鉄倉庫の血塗れの寝姿に覚えた——不安定で儂げな雰囲気など微塵もない。す

らつと伸びた華奢な四肢に、少し尖った印象の美顔、身長はほぼ俺と同じか、俺より数センチ高い。

いや、そんなことはどうでもよくて。

徐々に煙が晴れ、鮮明になつて行く視界に移つたのは、道路のど真ん中に穿たれた、巨大なクレーター。

薊は銀の弾丸が効力を失つてすぐ、地下鉄から文字通り『飛び出した』のだろう。人の脚力で、たった数歩のうちに、ビルの建ち並ぶ街中を飛び跳ねて。

そして、遙か上空から降り注ぐ隕石のように、カテゴリーキラーを圧殺した。

当然、その爆心地にいたはずの男は見る影もない。恐らくバラバラに千切れて、粉々に飛び散つたのだ。実際に目にする事はなかったその瞬間を想像して、幼い頃感じた、貧血に近い突発的な目眩が俺を襲う。

「ようやく煩わしい面倒ごとを一つ片付けられた。体は快調！　銀の呪いはぬしのおかげで完全に解けたし、この男も無事処分したしな！」

薊はそう言つてはしやぎ、真つ白い頬を俺の首元に何度も擦り付ける。まるで大型犬のような感情表現の仕方だとは思つたが、生憎今の俺にそんなことまで逐一反応する余裕はなかった。

「……………おい、」

「そうだ！　吾輩から礼をしよう！

何か欲しいものはあるか八幡、すぐに吾

輩が用立ててやるぞ！」

俺の声を遮り、更にトーンの上がった声色で、まくしたてるような薊の言葉が続いた。輝く表情は、我が子を慈しむ母親のようで、恋人と再会した少女のようにも見え、ともかく凄惨なまでの笑顔。

俺はその笑顔の真意を——薊の真意を汲みかねて、ぐちゃぐちゃでまとまらない思考もそのままに、薊の肩を掴んでそのまま俺の体から引き剥がした。

「待てツ!!?!!?！」

「……なんだ、どうした」

今度は幼子のように無垢な表情で、薊はじつと俺の目を見つめ返してくる。自分でも何故か分からない——だが薊のその目を見た時、薊の肩を掴む腕に、いつそう力を込めてしまった。

「最初から全部説明しろ、カテゴリーキラーのことも、お前のことも!!?！」

わずかな沈黙。

薊の表情が、水を打ったように静まり返る。

俺はその様に刹那の悪寒を覚えたが、しかしすぐに、薊またへにやりと笑みを作った。

「それならとつくにしただろう。吾輩はこの男に奪われたモノを取り返そうと……」

「――」

「まさか……『コレ』のことじゃあねえだろうな」

俺は右手に持ったカテゴリーキラーの封入瓶を、薊にかざして見せる。

「おお、それだそれだ。やはり優秀だな八幡、よくぞ持ってきてくれた！」

いやあ吾

輩としたことが寝込みを狙われ、まんまとしてやられたものだ」

……なんだそれは。

「なんなんだよお前……意味わかんねえぞ、なんでこの程度のモノをそこまでして奪い返そうとするんだ。それに、コレはお前にとってそんなに大きな損失なのか？」

カ

テゴリーキラーからすればコレは……ッ」

胸を締め付ける思いが、俺の喉をも締め付けたのか、思わず言葉に詰まる。

「きつとコレは、奴が家族の命を救うために必要だったものだ!!？」

でもお前に

とつちやあ、ほんの少し体を開けばいつでも手に入るものだろ!!？」

そうだ。

街中で時々見かける、献血の募集。アレに並んでいる奴らは、自分の血が何処の誰の為になるかも分からないにも関わらず――それでも、『まだ見ぬ誰かの為に』――そう願う、自ら献血に赴いているのだ。

それだけ、これは、その程度の話。

「なんで、分けてやろうと思わなかった!?？」

しかし、それまでの俺は忘れていたのだ。

人間が、そんなに都合良く、互いを理解し合えるわけがない。今まで何度だって、実感を持ってそれを知っていたはずの俺が、何故こんなことを失念してしまったのか。

自分にとっての当たり前が、誰かにとってもそうであるとは限らない。ましてや、生物の垣根が違うのなら、その差はより顕著なものになるだろう。

やがて薊が放った言葉に、俺はそれを思い知らされることとなった。

「吾輩がそこまでする価値が無いからだ」

薊の表情は明るくない。

だがしかし、特別怒っているわけでもなさそうだった。聞き分けのない子供を諭すような——申し訳程度眉を顰めた顔で、ただじつと俺を見つめている。

「お前はこれから喰う豚が失血で死にかけているからと言って、自分の体から血を抜き取って輸血してやるのか？　そんなことをする手間があるなら、死にかけているその場で殺すだろう」

薊が何かを言っている。

それはきつと、薊にとっての『当たり前』だ。

「何を勘違いしている八幡。我ら人狼にとって人間などそれほど取るに足らない存在な

のだ。地を這う虫、生い繁る雑草、それらと並んで立つほどに、吾輩から見た『人間』など、悉く無価値」

それでも、俺にとっては『当たり前』じゃ無い。
信じられない、信じたく無い。

よく知りもしない相手を勝手に解釈して、今まで何度痛い目を見たか——やはり俺は忘れてしまったのだろうか。

俺は勝手に、薊の——あの血みどろの姿に、痛みに喘ぐ苦悶の顔に、カテゴリーキラを恨む正当な理由と道理があるのだと信じ込んでいた。

「……だとしても、何故国を幾つも跨いでまで追い続けた。カテゴリーキラが取るに足らない存在だったと言うなら、そこまでして追いかける理由も……」

本当は、こんな質問をする意味など無いと自分でもわかっていた。どんな返答が来ようと、今更何かが変わるわけもないのだから。

「おお、それに関しては良い例え話を思い付いたぞ」
はつとした顔で、薊が指を鳴らした。

「自分の血を吸った蚊を、わざわざ生かして返そうと思うか？」
「……………もう、良い……………」

力なくそう答えた。

いつだってそうだった。

勝手に信じて、勝手に裏切られて。

そうして今回もまた、俺は勝手に塞ぎ込む。

俺は薊に背を向けて、ゆっくりと歩き始める。

「おい、どこへ行く」

「……………お前には関係ねえ」

胸に燻る、堪え切れない虚無感を抱えたまま。

封入瓶を右手に握りしめて。

ほんの一縷の希望だけを糧に、俺は何処かも分からない——あの男の大事な人達が待

つ場所へ向かう。

「あの男の娘なら、とうに死んでいるが」

……嗚呼。

「吾輩に追われてばかりで故郷の家族の元へ帰れなかつた数年の間に……相当悪性の病だつたようだ、勝手に死におつた。流星に傑作よなア、奴の、ありもしない希望に縋り続ける憐れな姿は」

もういい。

「本当なら吾輩が直々に真実を伝えてやろうとも思つたが、うつかりその前に殺してしまつたことだけが心残りだな」

もうたくさんだ。

ぐらぐらと揺れる視界の中、俺は封入瓶をそつと足元に置いてから——爆速で来た道を戻つて、薊に全力の右ストレートを叩き込んだ。巨岩同士がぶつかり合うような鈍い音が俺の鼓膜に打ち付ける。

「親に手を挙げるな、痴れ者」

目の前にあつたのは、人狼の姫の底冷えする美貌。髪も眉も歯も、全て初雪のように真つ白だ。

薊は、何処にそんな膂力が隠されているのか分からない細い指で、俺の拳を万力のよ

うにガツチリと受け止めていた。

「八幡、ぬしにはわからんだろうが、吾輩はこれでもかなりぬしを気に入っているのだ。このままぬしを手離すなんて選択肢は、はなから存在しない」

薊は緩やかな挙動で俺の拳を引き寄せて、鼻先が俺の首元に付くギリギリまで肉薄して来た。梔の花の香りと、生温い吐息が俺の感覚を刺激して、悪寒が背筋をぞわぞわ撫で上げる。

「お前の価値観を無理矢理にでも捻じ曲げてやろう。百回やそこら殺せば、流石に考えを改めるはずだ」

全身の毛が逆立って行くのが分かった。

獣の本能が、俺の選んだ選択肢を全力で否定して、危険信号を送っているのだと感じた。

「……ガタガタうるせえよ野良犬風情が」

それでも、仮に俺のこの選択肢が、間違っているとしてみても、だから何だ。

理屈だけの運命だのに振り回されるのは、もうたくさんなんだよ。今日だって、俺が一体何をしたわけでもないのに。

偶々地下鉄で『男』出会えい。

偶々『女』に殺され。

まともに喧嘩もしたことの無いのに、成り行きで命を賭けた闘いに巻き込まれた。仇だと思つてた男は実はそんなに悪いやつではなくて。

一方で憎めないと思つてた女は価値観が破綻した異常者で。

——ふざけんじゃねえぞ。

何で俺ばかりこんな目に合う。

本当はもつとスマートに生きたい。

腐らずに生きていたかった。

そう、これは完全な八つ当たりで、俺のロクでも無い人生の中で蓄積されて来た鬱憤が噴き出しただけ。それだけが今この場で、俺を突き動かす原動力だ。

何が正しいのかなんてのは、どうでもいい。

「ハ、ハハ、ハハハ、ハハハハハハハ!!？」

大音量の薊の高笑いが耳元で響いて、俺の脳を揺らした。そして薊は、俺の手を離れたかと思うと、アスファルトを踏み碎いてひとつ跳び——大きく距離を取ると、細く繊細な指で両拳を握り込んだ。

薊も始めるつもりなのだ。

俺を屈服させるために——更生させるために、力を持ってねじ伏せる気だ。

「さあ、我が覇道の前に露と消えるがいい!!?」
愚息よ!!?」

唄でも歌うかのように。

高らかな声が街に響き、空気をギシギシと揺らした。

薊は中腰に落とし、両手をだらりとぶら下げた独特の構えを取った。ノーガードのように見えて、何故か一分の隙も感じさせない。『人狼の姫』も本気なのだと、今になって冷静に現状を判断してしまう。

「死ぬのはてめえだ、このクソ親が!!?」

それでも、前に進むもうとする右足を俺は止められない。

彼我の距離は二十メートル強。

つま先に全体重を預け、加速を開始。

大地を砕き、一步目を踏み出す。

そして俺は、音速を超えた。